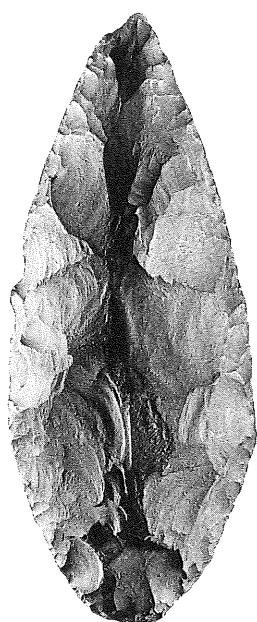


第2編
神子柴系文化を
めぐる諸問題



Point from Karasawa B (1/1)

第2編 神子柴系文化をめぐる諸問題

第2編では、「神子柴系文化をめぐる諸問題」と題して、唐沢B遺跡に直接的な関連性をもつ神子柴系文化について、故森嶋稔による以下の論考を再録した。

再録にあたっては初出誌の発行者である信濃史学会・長野県考古学会および御遺族の承諾を得た。

- 1 森嶋稔 1968 「神子柴型石斧をめぐっての試論」 『信濃』 20-4
pp.11-22 信濃史学会
- 2 森嶋稔 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」 『信濃』 22-10
pp.156-172 信濃史学会
- 3 森嶋稔 1984 「使用破壊痕のある神子柴型石斧III b型をめぐって」
『中部高地の考古学』 III pp.20-25 長野県考古学会
- 4 森嶋稔 1967 「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」 『信濃』 19-4
pp.33-35 信濃史学会
- 5 森嶋稔 1986 「神子柴型尖頭器とその周辺の二、三の課題」 『長野県考古学会誌』 52
pp.46-48 長野県考古学会
- 6 森嶋稔 1980 「系列文化編年への試み」 『編年』 pp.28-29
千曲川水系古代文化研究所

神子柴型石斧をめぐっての試論

森 嶋 稔

1

神子柴遺跡の発掘調査からすでに10年の歳月が流れようとしている。その間、この遺跡及び遺物をめぐって、これほど論議のまとになったものは、旧石器文化研究史の上ではない。まさにその意味においても、神子柴遺跡は記念碑的な存在といえよう。そしてその理解は、芹沢長介氏の細石器文化と縄文文化との間に介在する文化としての位置づけ、八幡一郎氏のいわゆる中石器文化を象徴する文化であるとの位置づけ、山内清男・佐藤達夫両氏のシベリア新石器文化の影響を受けて成立した、いわゆる縄文草創期直前に位置する文化であるとする理解等に一応代表される。

しかし、私は1967年4月、『信濃』(19巻4号)「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器—その神子柴系文化の系譜試論(予報)」で、神子柴文化は単にある限られた一時期の文化でなく、いわば神子柴系文化と呼ばれるべきものであって、その系譜の内部には、神子柴型石斧が次第に形態変化を遂げながらいくつかの文化階級を内包している、いわば後期旧石器文化をつらぬいて縄文文化最初頭にまで及ぶ一系列の文化ではないか、と言及した。この階級のあり方には、一部に修正点も問題としてもってはいるが、その主軸となる認識は変化していない。変化していないばかりか、さらにその把握を容易ならしめる資料が整いつつある。このほか、山内清男氏により、同氏等の見解の補説が、いわゆる「矢柄研磨器」の存在をめぐって展開された論考も行われているが、その資料も、いわば神子柴系文化が縄文草創期にも脈々と息きづいている有力な査証として把握される。

神子柴系文化の研究史はいわば10年に満たないものであるが、それはまだ、資料が出そろっていない段階での彷徨のようなものであることはいうまでもない。しかし、その彷徨こそがまさしく焦点への道程である

ことも、また、真実であろう。近年、いわゆる神子柴系文化に属する遺跡及び遺物はかなり増加の一途をたどっている。追求し得た遺跡及び遺物の空間的ひろがりは、大陸をひとまず除外してみたとき、樺太・北海道・東北・北陸・中部・関東・東海・近畿の一部にまで及んでいる。

本稿では、それらをめぐり、その存在の時間的空間的あり方に迫る前に、身近かにある神子柴系文化に所属する遺跡及び遺物について概観し、その問題の方向を求めてみたい。

2

今までの管見にのぼったいわゆる神子柴系文化に所属し神子柴型石斧を出土する遺跡は、長野県において見た限りでは15遺跡に及んでいる。その多くは、いまのところ東・北信地方に偏在するが、中・南信地方の神子柴系文化の遺跡は必ず近日中に遺跡数を増加するものと思っている。教示をいただければ幸いである。次にその一つ一つについて概観してみることとする。

神子柴遺跡

多言を要しない。いくつかの報告と、いくつかの論説について先学に敬意を表し、ここではいわゆる神子柴系文化の標準遺跡としての認識を提示するにとどめたい。遺跡は上伊那郡南箕輪村神子柴で、天竜川段丘上に形成された丘陵上に位置し、展望にめぐまれている。石器製作に伴なう剝片の出土が限られていて、石器はあるプランをもって検出されたので、特殊遺跡として、平常生活址とは考えられていないのは、どの研究者も同様である。すでに調査者によって報告が行われているが、その石器組成の全容については、まだ正確な分析が行われていないのが実状である。したがって、神子柴遺跡の評価は全石器の組成が知見にのぼることがあるときには、若干の変動があるのではないか

と思われる。

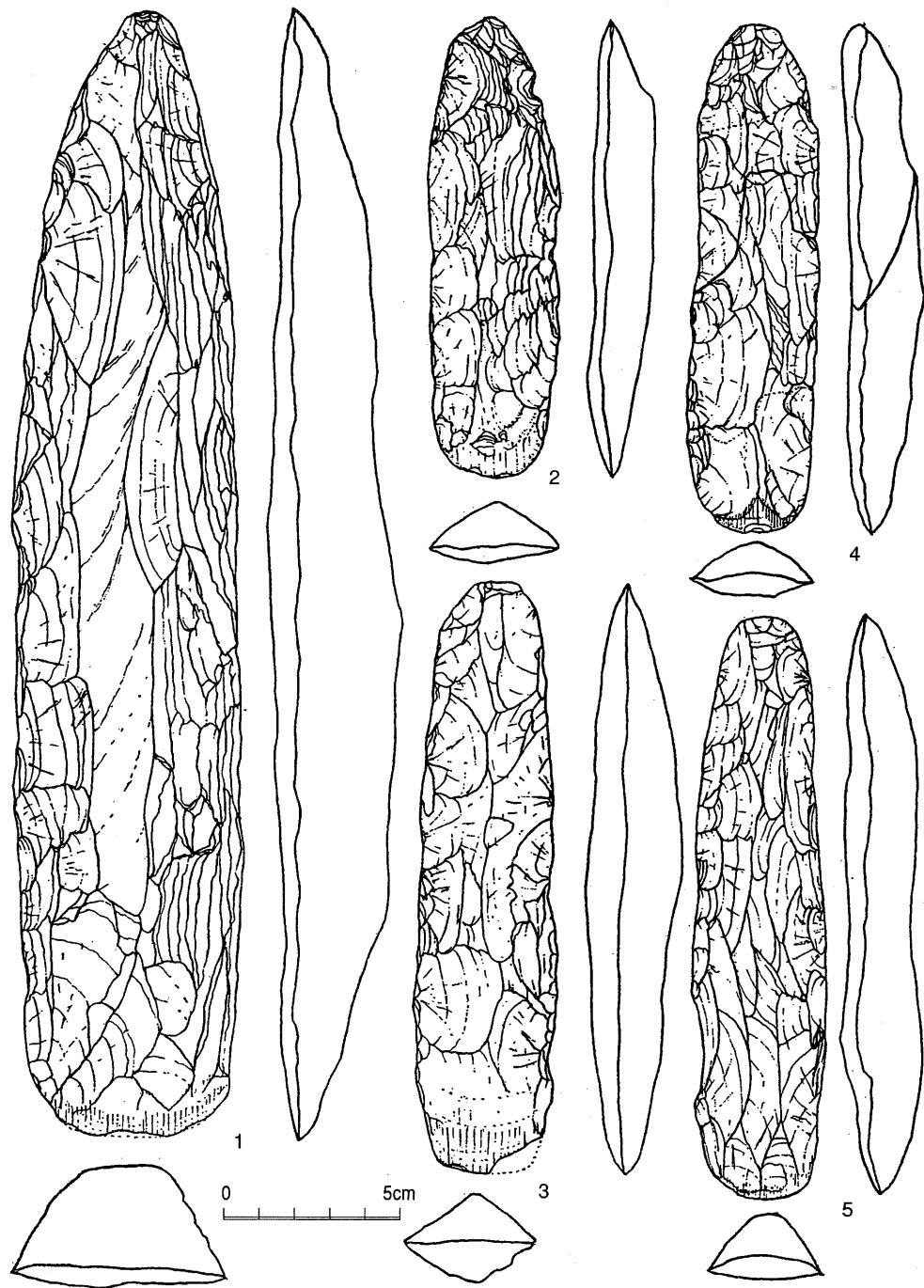
神子柴遺跡の遺物群中には土器はない。その報告によると、槍先形尖頭器16点（別に表採資料7点）・石斧13点、石刃10点・搔器3点・石核7点・断面三角形の錐・胡瓜形磨石となっている。林茂樹氏の好意により実見したときの記録によると、槍先形尖頭器はいわゆる神子柴型尖頭器を主体として、若干の器形変化が認められ、一様ではない。また、石斧は神子柴型石斧と呼ばれるもので、純然たる丸のみ型石器が入っている。神子柴型石斧もやはり一様でなく若干の器形変化がある。石核として把握されているものなかには、他の石器として認めた方がより妥当なものがあるように思われる。積極的に彫刻器と分類されるべき石器は認められないが、性格不明の石器もある。また、これら石器の製作作業によって打削されたと思われる多量の剝片は伴なっておらず、シャープなエッヂをもった石器と若干の剝片と石片があるのみである。概して石器は大形のものが多く、その組成は単純でなく、むしろ複雑である。石材にはかなり多様なものを用いている。

以上、神子柴遺跡を概観したが、この記述はまさに群盲象をなでるの感がある、と同時に隔靴搔痒の感のあるのは免れない。後日、詳論を試みたいと思っている。

宮ノ入遺跡（第1図）

宮ノ入遺跡は長野市松代町大室にある。大室古墳群の北谷をつめて古墳地帯をぬけたあたりの谷状地形の緩斜面の小平地である。遺物は植林作業の際の小ピットから出たものであると採集者の宮本速雄氏は語っている。採集された遺物は、すべて神子柴型石斧のみであって、5点である。他に採集されたものはない。近くの同室町笠付遺跡からは神子柴型尖頭器片が採集されているが、単独出土であって同石斧を伴なっているかどうか明らかでない。宮ノ入から採集された神子柴型石斧はすべて頁岩製である。第1図1に示した石斧は全長32.1cm、最大幅6.4cmに及ぶもので、かなり大形の石器であり、断面は中央部においては台形を呈している。その製作技法は薄く大形の剝片を剥いでいて、その調整は整っている。刃部はいわゆる片刃で、その正面形状は刃線はやや曲線を描くが、丸のみ状というほどでもない。刃部の一部のみに磨痕を認める。使用

痕と思われる擦痕も刃部に近い調整剝離面との境の稜に磨耗痕として観察される。刃部の平面形状は丸型である。2・4は小形の神子柴型石斧である。刃部の平面形状は丸形、2は刃部の正面形状の刃線が直線的で、4はやや丸のみ状をなしている。4はほぼ中央で折れているが、その折れ方は側面図で見れば裏面から背面にかけて斜めになっている。これは力の方向を示すものと理解してよいかと思う。刃部先端部に裏面方向から斜めに力が加ったものであろう。それがおそらくは器体保全力量を上わまわったために器体の破壊が起ったものであろう。おそらく、それがその石器使用の結果として起ったものとおもわれるが、器体に対する力点の方向にまさに反対の方向が使用目的の方向である。その方向は打割としてのもののように器体の方向に対して平行方向でなく、ある角度をもっているのは、その機能が、打割具でなく、打削具的なものであったことを暗示するのではないかと思われる。断面が常に背面に高く三角形ないし台形になるというの、果してただ単に、その石器の製作上の癖、あるいは器体保持の安定のためだけの理解でとどまることができるであろうか。おそらく、この4の石器の破壊力の方向が示すように、力が器体の方向に対して斜めに加わるその力学的作用方向を経験的に理解し、偏平な断面でなく、その作用方向に厚い断面形に、いわば背面に高い三角形ないし台形にまさに合目的的に製作されたものではあるまい。当然打削の際に残る痕跡は曲線状のものであることを期待する機能的所産であることもいうまでもない。4は更にもう1つの理解を提供してくれる。それは、点線で示した器体内側に、ピッチ様の黒褐色塗料が塗布されていたのではないかと思われる状態が観察されることである。同石器の両端及び他の同様風化度を示す図示した石器にはみられない状態である。これはこの破壊というアクシデントを補修するためのものであろうか。他の石器には見られないということは、これらの石器が他の何かに装着された際にピッチ様接着塗料を塗布したものであるという理解を妨げるものであろう。そしてそれは、この4の器体の破壊を補修するためのものではないかとの理解に近づくものといえよう。断定的な見解として提示することは避けたいが、一応、この附着物は、この石器の補修用のも



第1図 長野市大室・宮ノ入遺跡出土石器（1/2）
Fig. 1 Mikoshiiba type axes from Miyanoiri site (1/2)

のと考えておきたい。そうすると、この石器は使用による破損後も補修されて使用されたことを物語るものであろう。いずれにか装着されたものでないとするとこの種の石器、いわば神子柴型石斧は単独で手に握られて使用されたものと理解され、その使用は曲線状痕跡を期待する打削具的なものではなかったかと認識される。3の中央部の断面はむしろ菱形に近い。正面刃部刃線は直線的で側面刃形はやや片刃的ではあるが、

蛤刃に近い。平面刃形は丸形でなくやや角ばる角型である。刃部は局部磨製にふさわしく研磨されている。5は5点の神子柴型石斧中もっとも正面刃部刃線が丸のみ状を呈している。平面刃部は丸形である。宮ノ入遺跡の神子柴型石斧は1という例外はあるが、他の4点は概して小形である。1も例外でなく、その全体の平面形は両側縁はほぼ平行で狭長である。断面は台形、菱形のものが含まれている刃部平面形は丸形

が多く角型が1点ある。正面刃部刃線は丸のみ形のものが2点で、あとは直線に近い。刃部は表裏とも局部的に磨かれている。1は清水一男氏、2・4・5は宮本速雄氏、3は倉科小学校の所蔵である。調査の機会をつくりたいと思っている。

猪ノ平遺跡（第2図3）

猪ノ平遺跡は長野市塩崎猪ノ平にある。ほとんど長野市の南の端で更埴市に接する篠山の東斜面のテラス状地形上にあり、善光寺平を展望する事のできる所である。近くに湧泉があり、かつて湿原であったところを塞止めて灌漑用の池がある。その池の底の泥をさらうときに検出されたと所蔵者の荒井藤四郎氏は語っている。頁岩製である。新しい欠けもあるがほぼ完形である。断面はあまり背稜の高くならない三角形で、刃部の平面形は丸形、正面刃部刃線は一部丸のみ状を呈している。平面形両側縁は平行しないで、基部に狭くなるようなフォルムをもっている。磨痕というよりも磨耗痕といった方が適当である。それは背面のみに観察される。この石斧は長者久保遺跡にある報告書では打製石斧として分類している石器にほとんど大きなフォルムなども類似する石斧である。

池尻遺跡

更埴市大田原佐野山にある。俗称池尻をとつて池尻遺跡と呼んでいる舌状台地上に位置する。『上代文化』(33輯)に所収されている池尻遺跡の報告の中に、実測図を収録してある緑泥片岩製の石斧がそれである。断面三角というよりも、かまぼこ形である。平面形はやや基部にしまる形態をもち、刃部刃線は丸形であるがやや片寄っている。側面形は曲線を描いた片刃で、正面形における刃部刃線は直線状である。神子柴型石斧の一形態であろう。他に流斑岩製の神子柴型尖頭器の基部破片が採集されている。

手児塚遺跡（第2図1）

上水内郡豊野町手児塚にある。手児塚は、千曲川にのぞむ南曾峯丘陵上の小丘を指している。ここにある畠地のわきの石積みの中から村本鉄作氏によって採集されたものである。しかかつて手児塚遺跡は仮の遺跡名である。後日、この一帯で丘陵上の精査を行い、正確な位置を明らかにしたいと思っている。宮ノ入遺跡・猪ノ平遺跡などは、善光寺平の東縁部、南縁部に

位置するのに対して、手児塚遺跡は次のゴンボ山遺跡と並んで、北縁部に位置する。

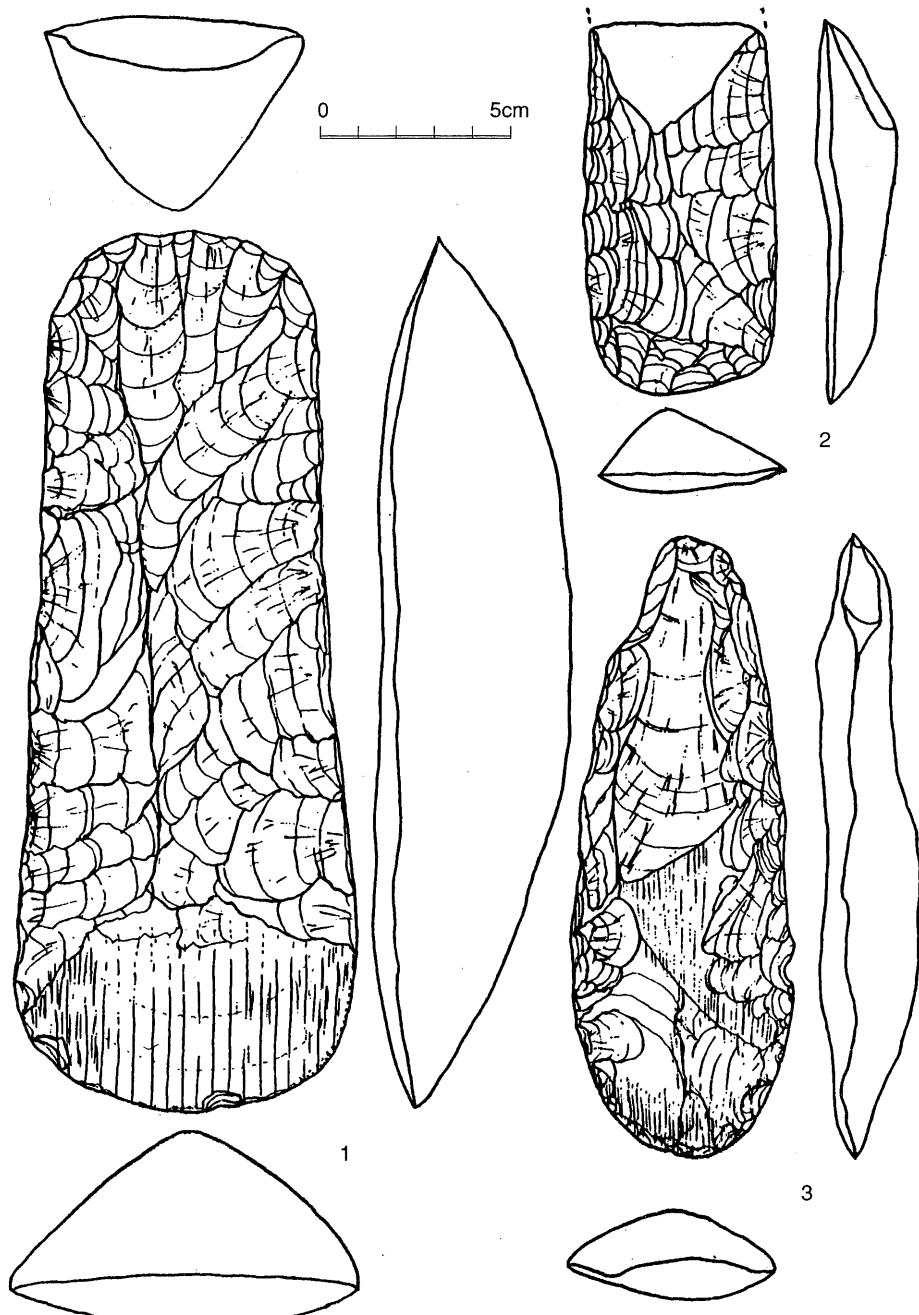
石器は玄武岩質の石材によっている。表面の風化が進んでいて、観察にかなりの時間を必要とした。神子柴遺跡出土のものに遜色のないフォルムをもっている。平面形はやや基部がしまり、刃部がやや広がる。平面右側縁がややしまり、曲線的に中央より基部よりに最少幅になるような調整が行われている。刃部の平面形は、丸形と角形の中間形をしている。刃部はよく研磨されている。正面刃部刃線は若干丸のみ状に弯曲するが直線状である。断面形が重厚な三角形であるので片刃である。全体を洗練された技法をもって打削した剝離痕が覆っている。この神子柴型石斧の典型ともいべき石斧のもう一つの特徴は基部にも刃部が作出してあって、その刃部は正に丸のみ状を呈しているという点である。したがって、両端に刃部をもつという形態の神子柴型石斧である。標準遺跡神子柴にもこうした石斧を見ることができる。側面形もかなり部厚く重厚で比較的重量がある。基部の丸のみ状刃部は研磨痕はない。磨耗痕は風化のため観察できない。

ゴンボ山遺跡（第2図2）

ゴンボ山遺跡は手児塚遺跡が千曲川べりの丘陵上に位置するのに対して、西のいわゆる飯縄山につらなる中央山地の西斜面に面する小丘陵上に位置している。この石器もゴンボ山丘陵あたりといわれるのみでその出土は確実でない。上水内郡豊野ゴンボ山で、所蔵は遺跡すぐ南に鎮座する伊豆毛神社である。石材は硬質砂岩によって行われている。その調整打は美しく整っている。平面形における側縁は平行的で、刃部はむしろ角形であるのが特徴的である。側面形は比較的偏平であるが、片刃であり、正面形における刃部刃線は直線的である。刃部に研磨痕も磨耗痕も観察できないほど風化が進んでいる。器体中央で折れている。この石斧も斜めに折れており、先に見た宮ノ入遺跡例とちょうど反対の所見になっているが、ゴンボ山例は先刃部片でなく、基刃部片であろうかおそらく手児塚例のように両端に刃部をもつ石斧であったものと思われる。

立ヶ鼻遺跡（第3図1）

信濃路も野尻湖の周辺にくると、神子柴系文化の石器を出す遺跡は多く、しかもその遺跡には重要な所見



第2図 長野県上水内郡豊野町手児塚(1). 同ゴンボ山(2). 長野市塩崎猪ノ平(3). 各遺跡出土
石器 (1/2)

Fig.2 Mikoshiba type axes (1/2) from Tegozuka site (1), Gonboyama site (2), and Inotaira site (3)

を提供してくれるものがある。

立ヶ鼻遺跡は上水内郡信濃町立ヶ鼻の湖底にある。石器採集者吉松雄一氏によると、立ヶ鼻から弁天島に向かうその湖底とのことである。ここは岬状に湖へ突出した地形をもつところで、湖底における舌状台地端ということになる。湖にならなかつた以前、あるいは減水期には陸地、とりわけ岬状に突出した地点といえるところである。

遺物はいまのところ図示したもの1点のみ採集されているに過ぎないが、該期の文化遺物が埋蔵されている可能性が大きい。頁岩質の石材によって製作されたかなりの重量のある石器である。いわゆる断面は三角形を呈し、平面形における刃部形態は中間形である。正面刃部刃線は直線状であり、片刃の石斧として、丸のみ状とはならない。平面形において、左側縁がやや器体内へ彎曲しており、右側縁はやや器体外へ曲線的

に張り出しているのが観察される。調整打は他の石器に比べると荒く側縁には階段状剥離が多く見られる。刃部の研磨は入念に行われており、背面刃部はふくよかな曲面をなしている。

小丸山遺跡（第3図2）

上水内郡信濃町柏原小丸山にある。小丸山は一茶記念堂などのある小丘陵で、この遺物はその丘陵の一部をけずり取り、その土（黄褐色火山灰土）を道路に敷いた際、その土の中から吉松雄一氏によって採集されたものであって、プライマリーな検出ではない。貞岩製である。背面の一部に節理面の皮を残してはいるが、かなり整った調整打を施している。平面形における右側縁がやや器体内に彎曲し、左側縁はやや外曲する。したがって、立ヶ鼻例とはちょうど反対のフォルムを形成している。正面形における刃部刃線はやや丸のみ状になるような曲線を見せる。刃部はほんの一部分表裏とも研磨されている。側面形はやや背面の方向に曲がるように調整されていて、力学的作用方向に一致するようなフォルムを見せている。正面形の刃部の刃線の形態は角形に近い。

砂間遺跡（第3図3）

砂間遺跡はすでに何回か紹介されていて、周知の遺跡である。野尻湖の砂間ヶ崎の一隅にあり、平常は遺跡は湖底である。

この遺跡から採集されている石器には、神子柴型尖頭器・有舌尖頭器があり、他に寸づまりの先刃搔器などが吉松雄一氏によって採集されているが、図示した神子柴型石斧は池田寅之助氏の採集になるものである。硬質砂岩質の石材によって製作されていて、石器全面にその節理痕が荒く残されている。平面形における左側縁はやや気持器体内に彎入し、右側縁はやや外曲する。平面刃部刃線は丸形である。その正面刃部刃線は明らかに丸のみ状を呈していて、刃部は局部的に入念に研磨されている。側面形は小丸山例と類似しており背稜の方向に曲っている。調整打はやや荒く行われているが、全体として整っている。

この遺跡は次ぎの狐久保遺跡などと同様に生活址で、剥片の採集も行われているが、砂間遺跡の石器組成の問題はまだ追求の途についたばかりである。土器の存在はいまだ確認されていないが、セットするか、ある

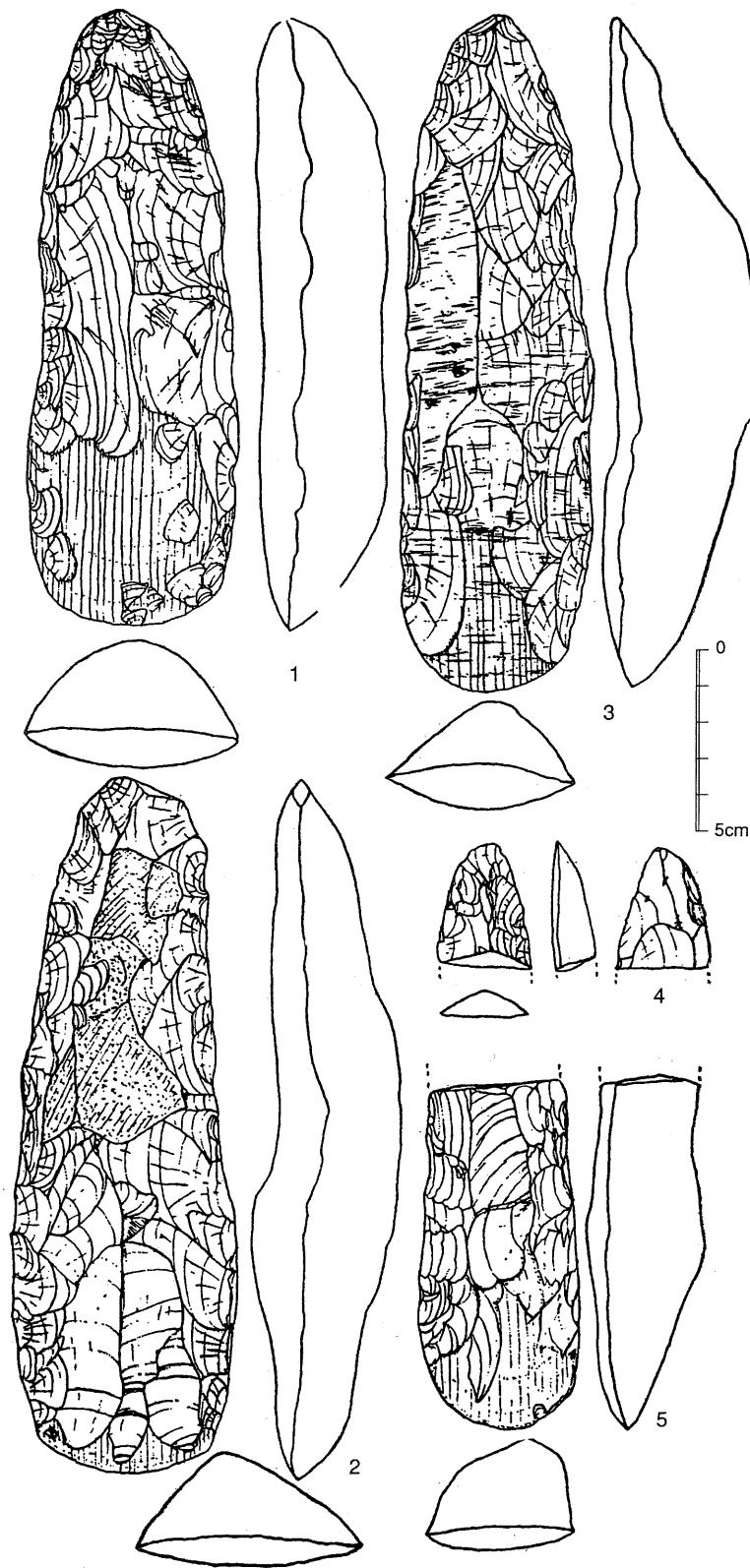
いはセットしないか、重要な岐路にある遺跡であるといえよう。

狐久保遺跡（第3図4・5）

狐久保遺跡は吉松雄一氏採集の資料を見て、故神田五六氏が昭和37年頃発掘調査を試みている。が、良好な包含層にあたらず、若干の剥片を得たのみで終っている。40年晚秋、小林孚氏を主体に森嶋が担当して再度試み、上層から有舌尖頭器・神子柴型尖頭器を、下層ロームからは小坂タイプのナイフを主体とする石器群を検出した。42年夏、遺跡破壊の緊急調査が小林孚氏を主体にして行われ、上層から有舌尖頭器と隆起線文系土器の伴出を確認した。他に通常彫刻器・搔器・礫器などがその組成に登場している。図示した神子柴型石斧は同遺跡から吉松雄一氏によって採集されたものであって、明らかにセットの一員であることは出土剥片からの所見からもいえる。他に基部のみのものがもう1点あり、都合3点となる。4は基部端片である。安山岩製で、小破片ながら美麗な調整痕が並んでいる。5は貞岩製である。ほぼ中央部でぶつかり折れている。美しい調整打剥離痕が並び、刃部には入念な研磨が表裏ともなされている。平面形刃部刃線は丸形である。正面形刃部刃線は直線状であり、片刃である。左右側縁はほぼ平行である。4・5の石器、そして図示していない基部のみのもう1点も加えて、狐久保遺跡の神子柴型石斧は、宮ノ入遺跡に見られたように、狭長で概して小型であることを指適することができよう。狐久保遺跡の遺物群は神子柴系文化が縄文最初頭に突入したときの事情を物語っていることはいうまでもない。それは、神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・有舌尖頭器・通常彫刻器・先刃搔器・石刃・礫器そして隆起線文系土器を組成の内容としていることから明らかである。遺跡はテラス状地形上に位置している。

杉久保A遺跡

杉久保型ナイフの標準遺跡である。その表層の砂層から第三次調査の際に、先端部のみの粘板岩製の石斧が出土している。杉久保Aの表採資料中に、神子柴型尖頭器と有舌尖頭器、先刃搔器があるが、あるいはこの系列の文化の石器群であるかもしれない。遺物の精査を行っていない現在、まだ確実なことはいえないが、一応ここで触れておくこととする。遺跡は湖底で、湖



第3図 長野県上水内郡信濃町野尻湖周辺遺跡出土石器（1/2）
1立ヶ鼻。2小丸山。3砂間。4・5狐久保

Fig.3 Mikoshiba type axes from the Lake Nojiri-ko area,
Tategahana site (1), Komaruyama site (2), Sunama site (3), and
Kitsunekubo site (4・5)

底の微地形で見ると、一つの舌状台地形上にある。なお、北海道には神子柴系セットに荒屋型彫刻器が加わっている場合があるが、この杉久保A遺跡の表採資料中にこの荒屋型彫刻器のあるのが注意される。

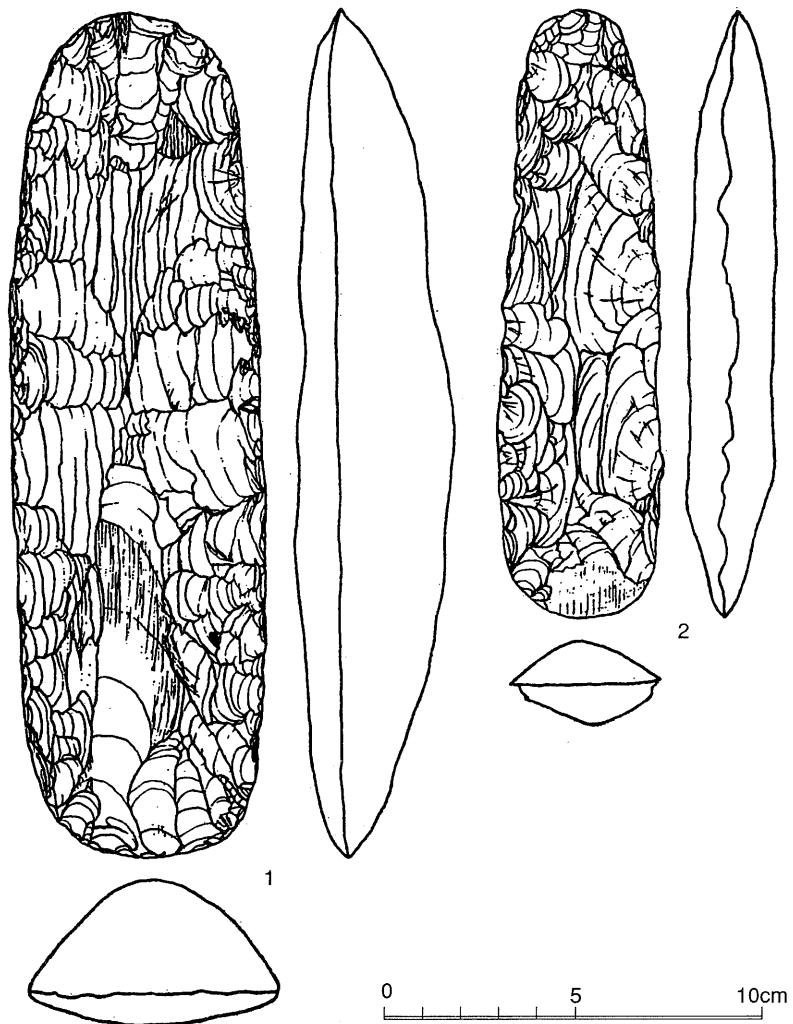
横倉遺跡

奥信濃の横倉遺跡は古く永峯光一氏によって報告された尖頭器を主体とする遺跡で、その報告書によると、千曲川左岸の段丘上に位置するものようである。当時、その尖頭器に横倉ポイントと型式名を与えていたが、その尖頭器は、いわゆる神子柴型尖頭器といわれる尖頭器の範疇に属するものである。そしてその報告書第5図15に示めされている「ポイントを造り出す過程におけるフレイク」とされている石器は、神子柴型石斧の破損品ではあるまい。玄武岩製の石器である。この遺跡も神子柴遺跡同様、その石器製作作業に伴なう多量の剝片の存在がないので、やはり特殊遺跡として把握された。

唐沢B遺跡（第4図1）

菅平高原に眼を転ずる。標高1200m台のこの高原には、いくつかの旧石器文化遺跡が存在するが、とりわけ神子柴系文化の所産と認められる遺跡は現在2遺跡である。他に2箇所、神子柴型石斧こそまだ検出されていないが、有舌尖頭器・先刃搔器などが採集されている地点であるので、更に遺跡の増加があることは必至である。

唐沢B遺跡は小県郡真田町菅平にあり、唐沢の開析した残丘状の舌状台地上に位置している。第4図1に示した神子柴型石斧が1点と調整打の施されている剝片が2点、他に彫刻器が1点採集されている。地主の黒岩正美氏が同地を開拓の際に発見したもので、黒



第4図 長野県小県郡菅平・唐沢B(1)、同菅平・小島沖(2)遺跡出土石器
Fig.4 Mikoshiba type axes from Karasawa B site (1), and Kojimaoki Site (2)

色腐植土表層の下に堆積している火山灰質ローム内に包含されていた石器である。頁岩製で、その残されている石器製作技法は整い、美しい剝離面を見せてている。平面形における両側縁は、中央部でややふくらむ中太の形態を示し、刃部は丸形である。正面形の刃部刃線は直線状で、いわゆる断面三角形片刃である。刃部は意識的に研磨した様子は観察されないが、若干の磨耗を感じさせる。とりわけ平面形における左側縁のエッジには、明らかに使用による磨耗を見ることができる。その所見からすれば、この石器は刃部端を使用することは当然として、なお、背面の断面三角形の稜に指をかけて器体を横に保持し、土を搔くような作業にも使用したのではないかと観察される。器体の外側に彎曲する例はすでに指摘してきたが、それはこうした機能を満たすための合目的的な配慮であったのであろうか。

他に彫刻器が採集されているが、長者久保遺跡採集の彫刻器に類似の1点がある。唐沢Bの示す時間的位置を暗示するものであろう。同遺跡はできるだけ近い時期に発掘調査を行い、その全容を明らかにする用意を進めている。

小島沖遺跡（第4図2）

同じく菅平高原の中央湿原にのぞむ台地上に位置している。昭和38年永峰光一氏によって試掘が行われたとのことである。その際参加した樋口昇一氏の教示によれば、ローム層中から有舌尖頭器及びその破損品が出土したとのことで、土器の出土は認められなかった様子である。

第4図2に示した石斧が小宮山茂樹氏によって採集されており、それが試掘の直接の動機となったものであるが、この石斧は定型的な神子柴型石斧ではない。

平面形は狭長であり、やや基部が向かってしまう形態を示している。刃部刃線は丸形である。断面はほぼ菱形に近く、正面形刃部刃線は直線状で、側面形における刃部はむしろ片刃でなく蛤刃状である。小瀬ヶ沢洞窟に例がある。おそらく土器を伴出するのではないかと思われる。

このほか、木曾地方の開田村柳又B遺跡にも神子柴型尖頭器が検出されているが、まだ神子柴型石斧は採集されていない。神子柴型尖頭器を出すが、神子柴型石斧が検出されないという遺跡はまだ多く存在するが、この問題は後日ふれることとする。

3

神子柴型石斧の解明は、もちろんひとり神子柴型石斧のみによって果されるものではない。それは神子柴系文化の文化組成を動員して、その時間的空間的変容をとらえ、その基盤の上に立ってこそ投げかけることのできるアプローチであろう。そのアプローチは神子柴型石斧に投げかけるという問題提起でありながら、それはとりもなおさず神子柴系文化の全容を明らかにしようとする意欲であるにほかならない。

神子柴系石器組成をもちろん、有舌尖頭器という石器を加えて、さらに最初頭の土器、隆起線文系土器

をもつという内容を示す遺跡は次第に増加しつつある。それも2つの階程があるらしく、いわゆる「矢柄研磨器」と石鏃という組み合わせがさらに加わる。もう1ステージ新しい階程が存在するらしく思われる。

神子柴系文化はその石器組成を媒介として、とりわけ神子柴型石斧の形態変化のあり方を中心にその系列化された文化の道程を明らかにできる部分が多いように思われる。形態の変化は機能の変化に対応するものである。その機能の変化は生産階程の変化に対応する。その生産階程の変化は時間的空間的変化に対応するものであろう。したがって、形態変化のあり方は、時間的、空間的変化に対応している座標の上で把握されてゆかれるべきものであろう。

本稿における資料と、明らかになっている文化組成を通観しただけでも、そうした座標上の焦点化は行うことができる可能性がある。平面形の変化、正面形の変化、側面形の変化、断面形の変化、石器製作上の技法の変化が、座標上の点として焦点化され、その焦点の移動が時間的、空間的変化として認識される方法を探してゆきたいと思っている。この試論は、そのための一つの方向づけをまさぐるものである。先学の教導を得、更に課題を展開してゆきたいと意図している。最後に資料を公開することを快く許容された諸氏に対し、厚く感謝の意を表したい。(1968・2・3)

神子柴型石斧をめぐっての再論

—その神子柴系文化の系譜について—

森 嶋 稔

1

『神子柴系文化』についての仮説を、試論の形で最初に提出したのは昭和42年4月の『信濃』であった。これは上和沢遺跡に検出された「神子柴型尖頭器」によせて、いわば尖頭器からのアプローチとして、その系譜について言及したものであった。更に1年後、昭和43年4月の『信濃』に、こんどは「神子柴型石斧」からのアプローチを描いてみた。この間、昭和42年の日本考古学協会総会の際に、「かつて夏島式土器と稻荷台式土器がいつも伴出するから同時期のものであるとの認識が行なわれていたが、夏島貝塚ではっきり分離されたことがある。それから考えて、神子柴型石斧が隆線文系の土器を出す遺跡から検出されるからといって、それをセットと考えるのは性急過ぎるのではないか。表採ではあるが調査するといふのが夏島貝塚での事のようになるのではないか。」(芹沢長介氏)との意見と、「土器を伴うものを一系の文化と考えるのはどうか。」(佐藤達夫氏)との意見が寄せられた。佐藤氏は昭和43年『史学雑誌』77-5の14ページで——森嶋稔氏は長野上和沢の石槍を紹介し、あわせて神子柴型文化を提唱される。しかし縄文文化に属するものを1系とするのはどうであろうか。——と同様意見を公にしている。昭和42年山内清男氏は「矢柄研磨器について」を『金闇丈夫博士記念論文集——日本文化と南方文化——』にて発表し、従来からの神子柴型石斧、断面三角形の石錐、植刃の存在に加えて、矢柄研磨器をもって大陸の新石器文化と強く関連するものであるとの論証点をあげて、神子柴系石器文化をふくめた先土器文化を新石器文化の所産であるとの所論を展開している。昭和43年10月日本考古学協会の大会が松本で開催された際に、1学生が芹沢長介氏の伝言を持って来て、田沢遺跡の調査に見学の機会をもたらした。田沢遺跡での現場ではいわゆる隆線文系の土器

に有舌尖頭器、木葉形尖頭器、先刃搔器、石錐などが、すでに検出されているとの教示を受け、その際も神子柴型石斧が「出ると思います」(森嶋)「どうですかね」(芹沢氏)ということになった。しかし2時間そこそこの遺跡での時間のうちに、裏面こそ調整打が行なわれていなかつたし、ラフな技術の形ではあったが、いわゆる断面三角形で片刃の石斧=神子柴型石斧が出土した。あまりにもラフな石器であったので速座にそれを認めることはできなかつたが、遺跡でのノートには神子柴型石斧と記されている。遺跡から宿舎へ向い既検出の資料をみせていただき、辞したが、昭和43年12月の『考古学ジャーナル』の「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」(芹沢長介・須藤隆)をみせていただくと——隆線文土器に伴う4点の小型打製片刃石斧を確認した——と報告されている。隆線文系土器と明らかなセットとの理解が行なわれたことが注目されるのである。昭和43年に注意される論文がもう1つある。加藤晋平氏の「片刃石斧出現時期」『物質文化』11号である。この論文はシベリア沿海州の報告を用いたものとして出色で、ウスティ・ベラヤXIV層～XV層からは15000～10000年BPといわれる片刃石斧が検出されているとの事である。——片刃石斧としての機能をもつ手斧の開発は、エニセイ川流域では20000年前以前に遡るわけである。——中石器時代ではなく、さらに古く旧石器時代にまで遡ることが明らかになっている。——との見解を提出している。昭和44年4月『考古学ジャーナル』1968年の考古学界の動向「旧石器文化」(芹沢長介氏)では、——このような遺跡を系譜たてて把握しようとする試みが(文献10^{11の昭和43年4月論文の誤り}森嶋)の論文である。長野県において確認された神子柴文化遺跡の数は現在5カ所であるが、これらはいくつかの階梯をふくんでいるのであって、後期旧石器時代が縄文時代初頭に及ぶ一系列の文化とみるべきではあるまいか

という。旧石器時代の終末から縄文時代の開始期につながる有舌尖頭器・片刃石斧・隆線文土器という三者の関連について、これからいよいよ興味が展開してくるであろう。——との論及が行なわれて来た。こうしたなかで、もう一度巨視的にまとまりを見せようとしたのが、昭和45年3月の森嶋稔・川上編の『菅平の古代文化』菅平研究会刊の神子柴系文化へのアプローチである。その中で、①土器をもたない階程、②土器をもち有舌尖頭器をもつ階程、③土器をもち有舌尖頭器をもち、石鏃・矢柄研磨器をもつ階程の三階程に大きく分離した。

いわゆる神子柴系文化はすでに提出された大陸の事情をみると、バイカル湖沿岸から東の沿海州まで広く分布するらしく、西はバイカル地方からどのあたりにまで及んでいるかは明らかでない。文化は単純に西からの波及を考えると、バイカル地方のイサコヴォ遺跡は今の段階では原点となるのである（山内清男氏・佐藤達夫氏）が、はたしてどうであろうか。もちろん資料の絶対的な不足をかこつ現時点においては、どれもみな仮説以前の段階にとどまっていると言わざるを得ないが、イサコヴォを原点として、西から日本列島への波及と線を引き、したがってその時間的空間的距離の故に日本列島の該系列の文化がより新しくなくてはならない、との論理はあまりにも単純に過ぎるのでないだろうか。いわばそれは、いわゆる片刃の、日本列島では神子柴型石斧と呼ばれる石斧を標式とする文化が、どこを原点として時間的空間的座標を拡大して行き、日本列島やバイカル地方がその内でいかなる軌跡としてとらえるかにあるのであろう。もちろん仮説以前の段階ではあるが、その原点は以前に沿海州にあり、イサコヴォよりは神子柴の方が座標として求められるとの予想をもったとき、山内・佐藤仮説はどうなるのであろうか。

神子柴型石斧の用語についてふれておきたい。局部磨製石斧→断面三角形の石斧→三面調整の石斧→神子柴型石斧→片刃石斧など研究の進展にともない、一つの研究史上の問題となる様相を呈しているが、用語は一つの概念を的確に表現するものがぞまれることは言うまでもない。石器の命名法が、機能的側面から行われるものより、形態的側面から行なわれるものの方

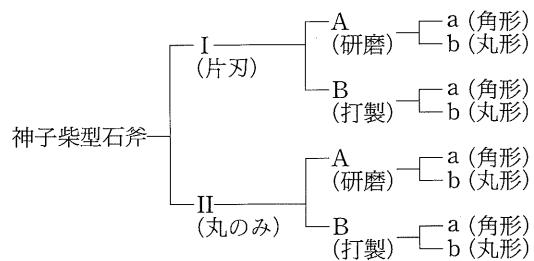
がよりティピカルであるとするならば、局部磨製の石斧では研磨が行なわれていないものは概念化することができない。断面三角、三面調整の石斧も、形態や製作技法からの命名であるが、断面が菱形になるもの、したがって四面調整になるものなどがあって単純ではない。片刃石斧はかなりその点無難にみえるが、片刃石斧は概念として弥生式文化に属する特殊な磨製石斧を指向しているばかりか、いわゆる片刃石斧では包括することができない丸のみ状の刃部をもつものや、蛤刃状に近いものなどをその概念の中に吸収することはできない。各地における先史文化を論ずるとき、最初に注意された遺跡名を冠して呼ぶことによって、その特殊なメルクマールとなるべき石器や文化を記念しながら概念化することは、考古学の方法としても最も通常に行なわれて来たものではなかったろうか。更にそれが、いくつかの形態変化を持つ内容をしめしている場合、単一な形態をのみ呼ぶことによって概念化するよりは、より更に有効である。したがって神子柴型石斧をかたくなに使用して来たのであり、今後もそうした方向でこの用語を使用することが当然と考えている。大陸の事情とかなり明確に対応することがわかって来たこの神子柴系文化は、そうした上に立って日本列島でのあり方を明らかにして更に概念化しておくことが必要なではないだろうか。大陸との比較考古学的考察や論及によりクロスさせるのは、更に更に大陸の事情や日本列島の事情の該文化の認識が高められ深められてからで遅くないのであるまい。

本稿で準備したのは、その理解をあたうかぎり日本列島の本州全域に及ぶようにした、その系譜についての試案である。日本列島での神子柴系文化の分布は、本州南半では未確認で、北半に濃密で、北海道にはかなり興味ある問題点を含みながら分布するようであり、それはサハリンに及んでいるようである。本稿で本州のみのあり方に限ったのは、ある部分ではできるだけ単純に把握し、それを出発点として理解を拡大した方がより真実に近寄れるのではないかと考えたからである。もう一つの理由は、北海道などの良好な資料が不足しているということである。本州でも落としてしまった良好な資料もあったのは、手許に文献などの基本資料の不足によるものであるので、後日、更に準備し

詳論を試みたいと考えている。先学の御教示を得ることとができれば幸いである。

2

神子柴型石斧は巨視的に見れば、平面形は狭長で、断面は三角形を基本とする石斧である。微視的あるいは分類的に見れば、刃部の所見によるのが最もティピカルで、いわゆる片刃（I式）と丸のみ（II式）とがある。そのIとIIには、それぞれ局部磨製の行なわれているもの（A式）と、行なわれていないもの、いわば打製のみのもの（B式）がある。またそのAとBにはそれぞれ刃部の平面形に角形（a式）と丸形（b式）とがある。これを図式に表わすとつぎのようになる。



神子柴系文化と呼んでいる石器文化は、この神子柴型石斧を強くその石器組成の中にもっているばかりか、第1表にも明らかなように、その石器組成のなかには

強く、もう一つの石器、神子柴型尖頭器をもっているのである。これは学術調査の行なわれた遺跡からは通常組成として検出されているもので、この石器文化の特徴的な石器の一つである。そのプロポーションは偏平長大、基部寄りに最大幅があるので、基部の丸くなる、いわば横倉型尖頭器となるものもあるのである。調査された遺跡から常に組成とされて認識されてはいないが、神子柴系文化に基本的な特徴的な石器ではないかと思われるものに、円板状石核と磨石、いわば胡瓜磨石と呼ばれるものがある。これらをもって文化の基本的なベースを考えてよいのではないだろうか。この他ある時期には三角柱状の石錐や、矢柄研磨器などが組成する様であるし、もちろん有舌尖頭器は、重要な役割をはたしていることが明らかである。

——縄文文化に属するものを一系とするのはどうで
あろうか。——との意見を思い起こすことができる。
第1表で見るごとく、神子柴系の石器組成をもちながら
隆線文系の土器あるいは、爪形文系の土器などを組
成する時期があるのは事実である。土器を伴わない長
者久保は神子柴型石斧を様式として、前3000年と論じ、
土器を伴うシャチノミ・ジュリンナの場合神子柴系の
石器組成を無視し、単に矢柄研磨器のみを取り上げ、
あるいは小瀬ヶ沢洞窟の場合も同様に神子柴系の石器

第1表 神子柴系文化各遺跡における遺物の組成
Table 1 Lithic assemblages from Mikoshiba-related sites

- ・遺跡名の頭に・のあるものは調査の行われたもの、他は表採
?あるかはっきりしないもの ×あるが数のはっきりしないもの

組成を意識の上にのせることなく、土器と断面三角の石錐や植刃のみをとり上げて、トロヤ第二層と比定しながら、したがって前2500年を遡り得ないとの比較考古学的論理を展開しているのは基本的な資料のあつかいに誤定があるのではないだろうか。シャチノミ・ジュリンナの場合も、小瀬ヶ沢洞窟の場合も、神子柴系の石器組成がベースにあるのであって、断面三角の石錐も、植刃も、矢柄研磨器も、どうやらある時期を代表する、その基本的なベースの上に乗ってくるべき石器なのであるように思われる。そうした所見の上に立ってみると、——縄文文化に属するものを一系とするのはどうであろうか。——との忠告はなにかむなしいものに聞こえるのは、浅学のよくするまことに浅はかな、向うみずな行為であろうか。神子柴系の石器組成はある限られた時期に特徴的なのではなく、旧石器文化終末期から縄文文化最初頭までの一系列をなす文化であるものと考えられる。有舌尖頭器も、三角柱状石錐も矢柄研磨器、そのいわゆる神子柴系文化の去就のなかで息きづく舞台の小道具の一つであるのだと思うのである。文化はある特定の形式で代表される場合もあるが、すくなくとも石器文化はその石器組成を通し、やがては文化組成へその認識をひそめながら、その文化組成の変容をみきわめ、それを再構成するのが斯学の方法であると考える。系統と分類とは身近なところから積み上げ、比較考古学的な方法は、その論理と方法が間違わぬよう駆使さるべきものであることが自らも省るべきことであるように思われる。

本稿は神子柴型石斧を中心にしながら、できる限りその石器組成を基底において考えてゆくように努力したいと思っている。

3

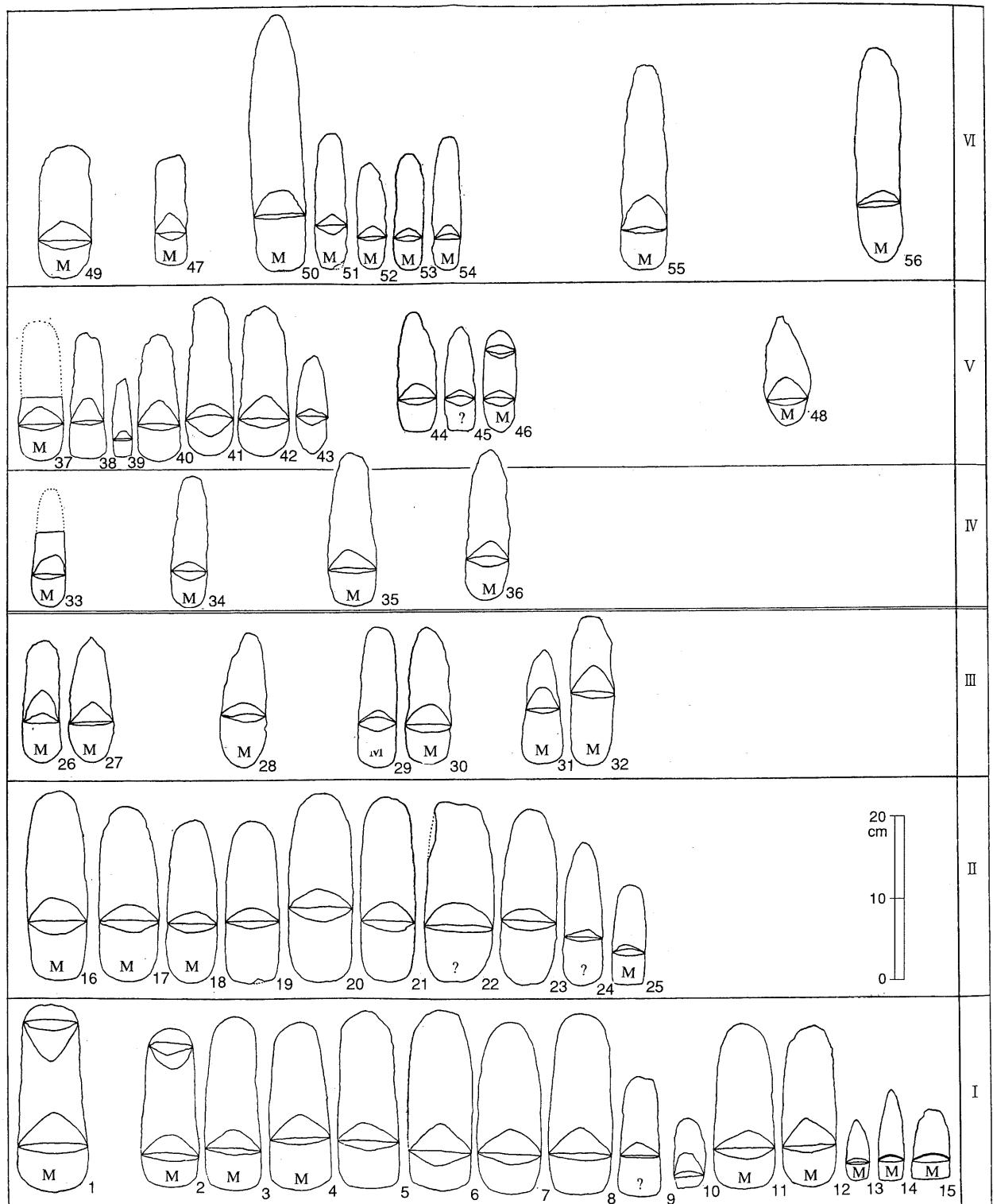
〔第Ⅰ期〕

日本列島で現在までの所、最も古い様相を呈していると思われる神子柴系の石器組成は神子柴遺跡のセットであると考えている。石器セットの量的なあるいは質的な中心は、神子柴型石斧と神子柴型尖頭器であって、石斧群は第1図に示めしたように、かなりなバラエティを示めし、尖頭器群も同様な様相を呈している。石刃は円板状石核から剥離されたものであるようで、

打面がいずれも小さく、しかもかなり大形である。石斧も尖頭器も、大形ぞろいで、よく整った技法をみることができる。三角柱状石錐と考えてよい三角柱状のグレーヴァースポール様の石器が一点あるが、小瀬ヶ沢や日向洞穴のような二次調整が行なわれていないもので、一次的な剥離面が三面通っている。単なる特殊な剥片と言えないで注意したい。彫刻器も同様で、黒耀石製の特殊な彫刻刀面をもつ剥片であるが、彫刻器と認めるには若干問題が残るかもしれない。神子柴セットの内で他に重要な石器は胡瓜形の磨石である。神子柴型石斧の研磨痕を詳細に検討してみると横方向が斜方向のものが圧倒的で、曲面をなし、それは凸面ばかりでなく凹面にも研磨が行なわれているのである。片手に石斧を保持し、片手に胡瓜形磨器を持って研磨するという方法がとられており、そのために中央の凹んだほそながい胡瓜形の磨石が必然的に開発されたものであろうと考えて間違いないであろう。他に石刃を素材とする先刃搔器と側刃搔器がある。またこの神子柴セットのなかで、従来からあまり注意されていなかったものに、更に両面石器がある。径10cm内外の平面形は鬼胡桃状で、断面形は凸レンズ状で握斧様の石器である。他に黒耀石塊を用いた礫器様の石器があるのも注意しておきたい。以上が、神子柴セットのあらましであるが、正式報告が出されない現在にあっては、隔靴搔痒の感があるが、一まずこれで正式報告に期待したい。

遺跡は、段丘上の小独丘陵上の頂央より北東に若干さがった地点であり、石器はあるプランの周上に並置されたように出土していて他の遺構はなかった。シャープな刃部と大型石器、そしてこの配列が墳墓説やデボ説の根拠となっているが、生活のセット一そろいと製作時の剥片がないことがむしろ積極的に生活址的であると考えているがいかがであろうか。

神子柴型石斧についてふれてみたい、片刃のⅠ式が12点に対し純然たる丸のみⅡ式は2点である。このうち第1図に見るように、2はその基部に丸のみ状の刃部を作出しており、これが、研磨されていない丸のみとなっている。平面形のプロポーションをみるとすんぐり形と中央より基部寄りややくびれる形の2つがある。刃部で見れば角形と丸形があり、Ⅰ式で研磨Aと



第1図 神子柴型石斧の編年

1 手児塚, 2~15神子柴, 16~25唐沢B, 26・27長者久保, 28猪ノ平, 29・30立ヶ鼻, 31・32杉村, 33狐久保, 34小島沖, 35砂間, 36小丸山, 37~43小瀬ヶ沢, 44~46西又, 47シャチノミジュリンナ, 48市場坂, 49日向洞穴, 50~54宮ノ入, 55柏崎, 56仁礼

Fig.1 Chronology of Mikoshiba-type axes

Tegozuka (1), Mikoshiba (2~15), Karasawa B (16~25), Chojakubo (26~27), Inotaira (28), Tategahana (29~30), Sugimura (31, 32), Kitsunekubo (33), Kojimaoki (34), Sunama (35), Komaruyama (36), Kosegasawa-cave (37~43), Nishimata (44~46), Shiyachnomijurinna (47), Ichibazaka (48), Hinata-cave (49), Miyanoiri (50~54), Kashiwazaki (55), Nilai (56)

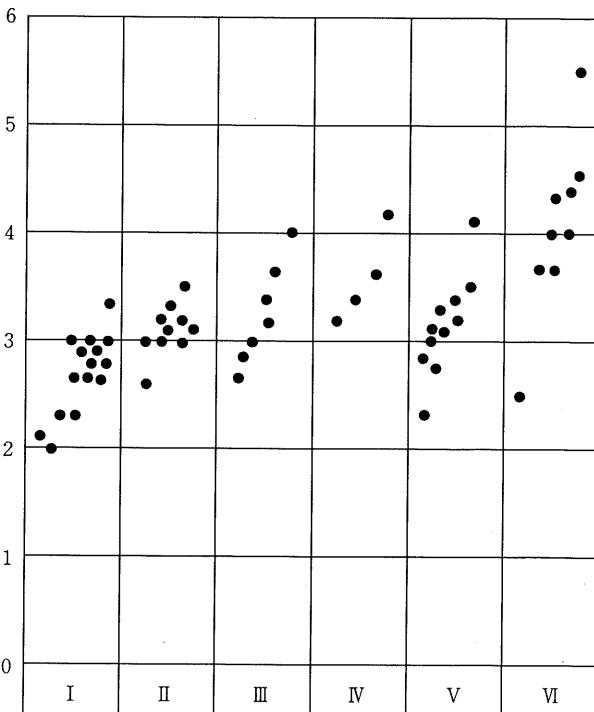
打製Bとはその量は相半ばしている。Aは角形aと丸形bでは相半ばし、打製ではaに限られる。II式ではAはaに限られ、Bはbである。

この時期I期として把握したいがI期の神子柴型石斧は、第2表・第2図に見ることができるよう、最大幅に対する長さの比が2~3.3で平均2.57である。どれも、巾広で丸い形であることが明らかである。またこの時期は神子柴型石斧の量も多く、打製のものと、研磨の行なわれたものとでは相半ばすることが特徴であろう。

第1図の1に図示した神子柴型石斧は長野県手児塚遺跡の表採資料である。玄武岩製の優品であるが、風化がかなり進行している。刃部は両端にあり、主要刃部(図中下端)はI・A・aであり基部刃の部(図中上端)はII・B・bである。両端に刃部を持つのは、神子柴遺跡の付表2の2と同様であるが、そのプロポーションははるかに手児塚例が大きい。しかしそれはまったくの相似形であって、あらゆる点で相似関係にあるといえる。手児塚遺跡は神子柴遺跡とほとんど同じふたつと言えるような立場上にあり、表採資料とは言え、その遺跡のあり方をうかがい知ることのできるものである。神子柴期より、あるいはワンステップ早い時期が成立するかもしれない予感をもつが、現段階ではまったく資料の不足でこれ以上の言及をすることができない。

I期の特徴としては次ぎのものがある。①石器が大型で重量感があること。②神子柴型石斧は大型で最大

幅に対する長さの比はおよそ2.5で丸い形で幅の広いものが多い。③平面形にややくびれ部があるものがあり、打製の丸のみを基部端に作出するものがある。④純然たる丸のみが存在する。⑤刃部平面形は角形が多い。⑥打製のもの、研磨痕のあるものは相なかばする。⑦石器組成の基本形がそろっている。⑧土器は伴っていない。



第2図 各期における神子柴型石斧の最大幅に対する長さの比分布

Fig.2 Length to width ratios of Mikoshiba-type axes by periods

第2表 各期における神子柴型石斧の最大幅に対する長さの比

Table2 Original data for Fig.2

															平均
VI }	49	50	51	52	53	54	55	56							4.04
	2.5	5.5	4.0	3.6	4.0	4.3	4.4	4.5							
V }	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48			3.20
	3.0?	3.4	4.1	3.1	3.3	2.9	3.5	2.8	3.2	3.1	3.6	2.3			
IV }	33	34	35	36											3.61
	3.4?	3.7	3.2	4.2											
III }	26	27	28	29	30	31	32								3.23
	3.6	3.0	2.9	4.0	3.2	2.7	3.4								
II }	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25					3.02
	3.2	3.0	3.2	3.0	3.0	3.5	2.6	3.1	3.1	3.4					
I }	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	2.57
	2.6	2.7	2.9	2.7	2.9	3.0	2.3	3.0	2.8	2.1	2.7	3.0	2.3	3.3	

〔第II期〕

第II期として分離したのは長野県小県郡真田唐沢B遺跡の石器組成のそれである。この石器組成は神子柴型石斧10、神子柴型尖頭器3、半月形石器1、石刃2、彫刻器1、搔器2、磨石2、剝片が9である。遺跡は神子柴遺跡とほとんど異なることない丘陵で、遺物出土点もまったく同様な条件の所にある。神子柴では石器の配列という遺構であったが、唐沢Bでは、楕円形にならぶ石器配列とピット、そして焼石炉の存在が確認された。

石器の大きさは神子柴期のI期より若干小さめで、20数cmに及ぶ尖頭器などなく、小型化している。石器組成も若干縮小しているが、確実な彫刻器が組成するようになる。しかし基本的セットはI期と変らず神子柴石斧がその主体を示しているのである。特徴的な胡瓜形磨石もセットしており研磨器が存在している。

神子柴型石斧についてみると、I・A・aが1点、I・A・bが2点、I・B・aの3点、I・B・bが3点である。又II・A・aのいわば丸のみが一点検出されている。I式ではAよりBが多い、いわば打製のものが多いのである。aよりbが多く、刃部は丸形へと指向していく。平面のプロポーションでくびれをしめすものが、第1図16の右側縁のみとなり、これも後退の気配をみせる。断面形も両凸レンズ状のもの、かまぼこ状のものなどがみられるが、やはり基本形は三角形であろう。25は神子柴例の15とまったく同形の丸のみで、その技術的系譜は歴然たるものがある。第2表と第2図に見るように、最大幅に対する長さの比は2.6から3.5の間にあって、平均は3.02である。I期が平均2.57であることを見るとII期の神子柴型石斧はそのプロポーションが狭長になる方向を指してるように思われる。

II期の特徴としては次ぎのようにまとめることができる。①石器が大形で、重量感があること。しかしI期のものよりやや小形化する感がある。②神子柴型石斧は大形で、最大幅に対する長さの比はおよそ3.0で、I期同様ずんぐり形であるが、I期よりはやや狭長になる。③平面形にくびれ部のあるものがない。④純然たる丸のみが存在する。⑤刃部平面形は丸形が多くなるような指向がみえる。⑥打製のものがやや多い。⑦

石器組成の基本形はそろっている。⑧土器は伴っていない。

〔第III期〕

この期として分離する代表的な遺跡は、長者久保遺跡である。長者久保のセットがそのままそのすべてであるかについては明らかにならないが、そのセットの中に欠けるものがあったとしても、その全容を知ることがあるいはできないにしても、そのあり方を知ることは可能である。すでに報告されているものを検討してみたい。神子柴型石斧が2点、I・A・b(27)とII・A・b(26)がそれである。神子柴型尖頭器・木葉状尖頭器・先刃・側刃・周刃搔器があり、彫刻器がある。石刃は大形のものではなく、概して中形である。長者久保の石器群の特徴は、II期の唐沢B例からみるとそれはすべて更に小形化の方向で把握される。神子柴型石斧は第1図でみることができるように、平均の3分の2に小さくなり、各石器もそれは同様な現象を呈している。長者久保期・III期は彫刻器の増加が現象している。その内容は斜角彫刻器(a類)とb類といわれる主要剝離面から直角な調整打面を作り、それを基点として斜角な彫刻刀面を作る彫刻器がある。かつて「上ヶ屋型彫刻器をめぐって」(『信濃』)という小論を書いたとき、この技法の系譜についてふれ、神山型彫刻器→上ヶ屋型彫刻器→荒屋型彫刻器という流れを提案したことがあるが、そのメルクマールとなったのはその打面調整の技法・彫刻刀面の作出技法・その使用痕についての所見であった。その系譜における一つのポイントとなる杉久保II群の彫刻器の例とも同通する内容を持つものであることは注意される。いずれこのIII期には、彫刻器の増加が、現象することは注目される一つのあり方であろう。

神子柴型石斧についてふれたい。神子柴型石斧は2例であるが、第1図の27は先に上げたようにI・A・bであるが、その報告によれば、研磨は表面刃部のほんの小部分であるらしく、その平面形は縄文中期の打製石斧を思わせるものがある。調整はきわめて荒っぽく一部に石材の節理面を利用されている。26はII・A・bでその刃部はアヒルの口ばしのように上反りしている。表面の研磨は縦位にかなり入念に行われている様

子である。II期に比べかなり小形化しており、第2表でみると3.0及び3.6となり平均3.3で、その最大幅に対する長さの比はなお一層狭長になる傾向を示していることがわかる。

28は長野県猪ノ平遺跡の採集品で長者久保例の27とプロポーションや石器の所見に著しい共通点がある。29・30は野尻湖立ヶ鼻である。大形石刃を伴って採集されており、I・A・aである。平面形に若干くびれ部をみることができる。29はどちらかと言えば26例を共通する丸のみであろうか。31・32は藤森栄一氏がかつて「歴青質石器」としてその報告を戦前に行なった中石器的様相としての把握をした一群であるが、ここには神子柴型石斧が2点出土しており、大形石刃と胡瓜磨石を伴っている。新潟県北蒲原郡笛岡村杉遺跡の採集品である。大木金平氏旧蔵と書かれた古いが極めて適確な実測図と拓本を藤森栄一氏の御好意でお借りしたものである。I・A・a(31)とI・A・b(32)であるが32はやや丸みの状に刃部は反るようである。31は平面形がややくびれる様相が観察される。長者久保をのぞいては採集資料であるので、明確なことは言えないが、一応石器セットそのプロポーションから考えてこの期として大過ないものと思われる。付表3・4をみると神子柴型石斧の最大幅に対する長さの比が2.7から4.0まで平均は3.25である。II期からみて更にその神子柴型石斧の狭長性への方向は強く現象していると思ってよいのではないだろうか。

III期をまとめてみると、次のことが明らかである。

①大形の石器からしだいに小形化の傾向を著しく認めることができる。②神子柴型石斧は小形化して来て、更に狭長性3.25がはっきりして来る。③丸のみは角形から丸形に変化しているが存在する。④刃部平面形は丸形が基本形となっている。⑤27・28はほんのわずか研磨痕を残すのみであるが、他は全部研磨が行なわれたものである。⑥石器組成のなかに、彫刻器がかなりの量入ってくる。⑦土器は伴っていない。

II期とIII期の間にはもう一期の存在があるかもしれない。神子柴型石斧の小形化があまりにも著しいからである。土器を伴わるのはこのIII期までである。I→II→IIIにしたがって石器組成の中心は、神子柴型石斧、神子柴型尖頭器から量的にも質的にもはなれ、彫

刻器や他の尖頭器・石刃などにその中心がずれて行く傾向を認めざるを得ない。大形の神子柴型尖頭器も小形化の傾向を認めることができるが、このことについてはかつて、昭和42年の4月『信濃』に、「……上和沢の尖頭器」を書いて一つの展望を求めておいた。それは偏平長大の神子柴型尖頭器が、そのプロポーションのため儀器や、副葬品として使用されないことを目的として製作されたものであるごとき理解によって、遺跡の性格まで考えを指向するような傾向をみたときに、それは、いわばその偏平長大の尖頭器も、確実な使用を目的とした、機能を目的とした利器であるはずであるとの考え方から、その着柄について一案を出したものであった。それは柄部によるはさみこみとアスファルトによる接着であった。そこから当然でてくると想われる技法の系譜として一つの仮説を提出しておいたのである。①はさみこみによる器体の保持→②先端部の折れの補修による有舌尖頭器の発生(組み合わせ石器の発生)→大形器体の製作から小形化し、やがて両面加工の植刃の並列と有舌尖頭器の組み合せによる利器の発生、以上がそれであった。現段階でもその基本的な考えには変更がない。III期からIV期への発展はそうした利器の製作技法上の変革が内在していると考えてよいのではあるまいか。それはもう一つの変革と対応する事件であろうか。それはIII期までは土器の共伴がなく、IV期に入ると土器の共伴があるということである。

〔IV期〕

野尻湖畔・狐久保遺跡、新潟県・田沢遺跡などがこの期の代表的な遺跡である。IV期のメルクマールとなるものは、神子柴系石器組成に有舌尖頭器が加わることと、もう一つの大きな変革は現時点で最古の土器と考えられている隆線文系土器が文化組成の一員として加わることである。

狐久保遺跡の組成についてみてみたい。第1図に所載した33の半次の神子柴型石斧の他に、ごく小形の定型の神子柴型石斧があり、更に基部破片が2点あるので計4点である。かなりしっかりした安山岩製の神子柴型尖頭器があり、木葉形のラフな尖頭器が少量と有舌尖頭器がある。小形の彫刻器があり、先刃搔器があ

り、表採資料には側刃搔器もある。更に中形の石刃がある。この他に直方柱状の礫器がある。伴出した土器はいわゆる隆線文土器である。すべて破片であるが、①口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線の上をジグザグな籠状工具による刻み目を有するもの、②口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線状を並列的な刻み目をつけたもの、③細いみみずばれ状の隆線をもつもの、④無文のもの。この4種の土器片は、もとより4種の土器の存在を指しているのではなく、①②③の組み合わせの一體の土器、④の組み合わせの一體の土器、あるいは①②③を組み合わせた一體の土器との認識が正しいことは言うまでもない。

有舌尖頭器は第一次・第二次調査を合わせるとかなりの量の検出がある。詳細な分類を行なっていないがすくなくとも二形態あり、芹沢編年でいう第II群の21に近い例と、23に近い例が認められる。北海道の立川遺跡例になるもので、若干問題があとに残りそうである。神子柴型石斧はI・A・bにあたるものが刃部のわかっているもの2点であるが、いわゆる丸のみのII式に属するものは検出されていない。

田沢遺跡についてその詳報のない現在多くの誤りをおかすやもしれないが、若干その組成についてふれてみたい。それは第1表に見るようなものであるが、神子柴型石斧は4点でI・Bのaとbに属するものであるらしい。神子柴型尖頭器は確実な資料は明らかでないが、木葉状尖頭器とされているものの中にこれがあるものと考えている。また木葉状尖頭器について、有舌尖頭器がある。側刃が鋸歯状になるもので柄状あるいは舌状に張り出す舌部がある。芹沢編年ではこの見えしのない有舌尖頭器は所属する所がないがIII群の小瀬ヶ沢期にもっとも近いであろうか。三角柱状の石錐はないが、つまみのある石錐がある。他によく整った先刃搔器がある。以上が速報にふれられている石器組成である。土器は①口縁部に横走する粘土紐のはりつけによる隆線上を、籠状工具による刻み目をほどこしたもの、②ほそい隆線がジグザク状になるもの、③無文のものである。①②の組み合わせ、②③の組み合わせの考えられる土器である。田沢遺跡の隆線文土器は、狐久保遺跡のそれとも最も近い関係にあるようである。

この二つの調査が行なわれた遺跡の他に、表採ではあるが、かなりその組成のはっきりしている遺跡に野尻湖底の砂間遺跡がある。第1図の35に示したのが神子柴型石斧であるが、それはI・A・bに属するものである。他に神子柴型尖頭器・木葉形尖頭器・有舌尖頭器・先刃搔器・側面刃搔器がある。おそらく湖底の表採という条件のもとでは土器片は採集できなかったと思われるが、このIV期に属する隆線文土器がセットしていたと考えてよいのではないだろうか。有舌尖頭器は芹沢編年のIII期の上黒岩・柳又などに検出される柳又尖頭器がそれである。この他に野尻湖に近い小丸山遺跡から検出されたという神子柴型石斧(36)もあるが、これはI・A・aである。菅平高原の小島沖遺跡は2点の神子柴型石斧(34)があるが、1点はI・A・aでもう1点はI・A・bである。この遺跡からも有舌尖頭器が出土していると言われている。土器や他の石器はまだ検出されていないが一応この期と考えてよいものと思われる。

神子柴型石斧についてみたい。この期の資料は確実な全容について知れる資料は少ないのでおよそそのあり方を知るのみである。しかし、一応第2表に見るよう、最大幅に対する長さの比は3.2から4.2に分布し、その平均は3.6である。田沢例を速報の写真から比を出すとおよそ3.9である。III期の比が3.25であることからみると更にその狭長性は進められていると言えよう。狐久保・田沢側に見るよう石器の小形化は更に行なわれ、石斧の石器組成内にしめる割合は、同様に落ちて来ている。有舌尖頭器の出現による量の変化であろうか。

遺跡の立地についてふれてみたい。I・II・III期とも丘陵上が多く、かなりかたくなにそれを守っているようである。III期の立ヶ鼻例のように湖底ではあるが、湖底にしづんでいる丘陵上地形の上に遺跡が立地していることを考えると、先に見たように、かなりその立地はIII期までは丘陵上という保守的な立地であることができるが、IV期の狐久保は山ふところの斜面のテラスで、田沢は段丘上、砂間は岩陰状のところで、小島沖は丘陵上と、その立地にかなりのヴァラエティを見ることができる。それは何に原因するのであろうか。

IV期を総括すると、①石器は更に小形化する。②神

子柴型石斧は更に小形化し狭長性をみることができ、その比は3.61である。③確実な丸のみと分類できるものはなくなるのではないだろうか。④刃部は丸形が基本形である。⑤すべて研磨するのが基本である。⑥石器組成の中に有舌尖頭器が入ってくる。彫刻器の量は限少し、わずかに残る。⑦土器（隆線文系土器）が伴う。⑧石鎌・矢柄研磨器は組成しない。

有舌尖頭器の組成について若干考えてみたい。荒屋細石刃文化に伴うエンドブレードがやがて立川遺跡における有舌尖頭器に変化するものと考えることは、両遺跡における荒屋型彫刻器の存在からその密着度を考慮し可能であろうが、神子柴系文化に属する狐久保遺跡の有舌尖頭器が立川例に近いことを考えると、有舌尖頭器と言う刺激が、細石刃文化からのものであるのか、あるいは、神子柴系文化からのものであるのか、あるいはまだ異なる系列を容認すべきであるのか、重要な課題であるように思うのである。土器を伴うことのない立川と、土器を伴う狐久保との違いは、各系列間における発展段階をおさえることになるのかは、この両者が並列的であるか、あるいはその並列に多少の前後関係があるかによって明らかになるものがあろう。今回はこの段階でふみとどまり、その問題を今後に期したいと思うが、有舌尖頭器における芹沢編年のI群にあたる鳴鹿遺跡・本ノ木遺跡などの立川以前の有舌尖頭器としたものについての処遇はいかがなものであろうか。

III期とIV期の間に土器を伴わないが有舌尖頭器を組成しているという時期があるであろうか。今後の研究にまつところが大きい。

隆線文系土器の側からこれをのぞいておくのも今後の方向の為には有効である。隆線文系の土器もどうやらかなり息の長かった土器であるように思われ、そのこまかに編年も若干試みられている。それらが更に精密になった上で、考えて見るのが最も間違うことがないが、たとえば福井洞窟遺跡の細石刃文化に伴った隆線文土器、いわゆる神子柴系文化に伴った隆線文土器、神子柴系の石器組成を伴わずに有舌尖頭器と隆線文土器という標識で存在するもの（これは問題が残るが）など、その時間的・空間的関係について、石器組成の内容の変容から、またその様式的変容から、あるいは

その土器自体の変容やその組成から、そしてもちろん層位学的所見から明らかにすべきものであろう。

〔V期〕

V期の標式的な事件は、石鎌の出現である。その基底には、どうやら力弱った神子柴型石斧や、神子柴型尖頭器があり、有舌尖頭器はむしろ主要な役割りを果すことになったかもしれない。石鎌の出現と対応する矢柄研磨器も組成し注目されるのがこの期である。この期の遺跡にはすでに調査されたものが多い。小瀬ヶ沢洞窟、木曽・西又、同・小馬背遺跡、高知・不動岩洞窟などである。

小瀬ヶ沢洞窟はその出土資料を検討してみると第3層と第4層にわたって神子柴系文化に属する遺物群が出土しているのであるが、その間にはかなり不明な点も多い。洞窟遺跡調査の先がけとなったこの調査には、調査方法上の問題もあったかもしれないが、このおびただしい遺物群はあるいはもっと細分化して把握できるものであったかもしれない。ここでは一応4層の資料を適出してみた。遺物群はもっともヴァラエティに富んでいる。神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・半月型石器・木葉型尖頭器・有舌尖頭器植刃・三角柱状石錐・つまみのある石錐・彫刻器・先刃・側刃・周刃・抉入抉搔器・中形石刃・両面石器・石鎌、そして隆線文土器などである。この石器組成をみるとV期よりも前の期に分離できる内容のものがふくまれていそうに思われるのであるが、ここでは一様にあつかっておきたい。しかし、洞窟遺跡は長時間の滞在と集中性が高いことから考えれば、これがある限定した一時期であるとすることもあり得るかもしれない。

有舌尖頭器は芹沢編年というIII群に属するものである。とかく問題の定着しない植刃があり、三角柱状の石錐は植刃と共に大陸と強く関連するものであるとの指摘が山内学派から行なわれた。多様な搔器と石鎌が出現するのである。土器は隆線文土器の他に多彩な土器が検出されているが、このことについては現段階では理解の及ばないことであり、小瀬ヶ沢洞窟が一人孤立の状態から考えれば、層位の搅乱によるものであるかもしれない。小瀬ヶ沢洞窟の神子柴型石斧は総数100点内外であるらしい。そのすべてにはもちろんふれる

ことはできないが報告書に図示されたうち4層のものに限定して第1図へは所収した。I・A・b、I・B・a、I・B・bで、圧倒的に打製の丸形が多い。丸のみは一点あって39に示したものである。

小馬背・西又は木曾開田高原で同じ段丘上に遺跡は立地している。この遺跡は、昭和43年及び44年に調査されたもので、有舌尖頭器の柳又尖頭器を採集できていた遺跡であった。柳又遺跡が調査されてからすでに10年の歳月が流れようとしているが、この両遺跡はその柳又期におけるいわば有舌尖頭器を主体とする文化の文化組成を明らかにしようとするものであった。それはすでに柳又遺跡では有舌尖頭器に隆線文土器がセットして注目されていたが、シャチノミ・ジュリンナではその柳又尖頭器に、神子柴型石斧を更にセットしていることが明らかになったので、この両遺跡はその問題点を一挙に明らかにしようとしたのである。この両遺跡は有舌尖頭器と非常にラフにはなって来ているが神子柴型尖頭器そして基部丸形の横倉尖頭器などを主体としており、小馬背では1点、西又では3点の神子柴型石斧を検出したのである。柳又尖頭器を組成する遺跡は神子柴系列に属する遺跡ではないかと多年考えていたことはやはり事実のように思えて来たのである。柳又遺跡を4年間にわたる調査ののちたびたび訪れては、神子柴型石斧の存在をたしかめる資料を採集できなかつたのはどうしてであろうか。それは①時間的なずれがどちらかにあり、すでに神子柴型石斧を石器組成から失ってしまったからであるか、②当然組成するが、未検出であるかのいずれかであろう。小馬背・西又両遺跡からは隆線文土器が出土しているが、口縁に横走するかなり太めの隆縁がはられている。刻み目は明確にならない。小馬背では縦走するものもあるようである。西又例で見るのは、隆線の粘土紐ははげ落ちて明らかでなく、口唇部にななめの刻み目の行なわれるものである。禾本科系のスサが入る特殊は柳又をはじめとする、上黒岩など柳又尖頭器を特徴的に出す遺跡の隆線文土器の通常性であるように思われる。

小馬背・西又とも少量の石鏃を組成している。これは柳又遺跡においても同様であったが、この期の大き

な特徴である。剝片鏃のようなものからかなり入念な製作になるものや、ノン・シンメトリカルなものまである。柳又・小馬背・西又ではかなり精査したが、矢柄研磨器は検出できなかった。

ラフな尖頭器状のこぶし大の両面調整の石器があるが、これは握斧状の石器で折れたものが多く、接合するところの形態になるのは、柳又インダストリーとして特徴的であろう。

神子柴型石斧はI・A・b、I・B・aなどで、再び角形を復活する。神子柴型石斧はIV期のものと比べて更に小型化する。こうした小形化した神子柴型石斧がI・II期の優大な神子柴型石斧との間に、どのような機能の変革があり、その文化の保守性をまがりなりにも保持しているといったあり方に達していることも関連して、重要な課題であろう。今はそのあり型にふれてのみおきたい。

高知・不動岩屋洞窟の報告が『考古学集刊』4ノ3（岡本健児・片岡鷹介）に所載されている。その組成をみると神子柴石斧・神子柴型尖頭器と思われるもの・柳又型尖頭器・小形の搔器類・小形石刃・石鏃・矢柄研磨器・隆線文土器がそれである。④隆線文土器⑤スサ入りの無文土器が個体として把握されるものであるらしく、また④⑤は木曾・柳又、同じ西又、同じ小馬背のそれと一連のものと思われる様相を呈しており、その有舌尖頭器は、柳又尖頭器そのものである。神子柴型石斧は刃部破片で全容は明らかでないが、I・A・bである。石鏃は矢柄研磨器と共に伴している。

この他表採資料として埼玉・市場坂遺跡（48）があるが、I・A・bの神子柴石斧に、神子柴型尖頭器と剝片鏃が採集されているようである。一応この期の組成をもつものとして把握しておきたい。

神子柴型石斧について総括してみると、この期はかなりヴァラエティに富んでいる。小瀬ヶ沢について若干不安もあるが、小形化の推進と、特殊化の現象と観察することができるのである。角形・丸形相半ばし、IV期と同様な大きさの神子柴型石斧もある。平面形もかなり多様である。研磨の行なわれたものは若干すくなくなり、打製のものが多くなる。器体の多様化は、機能の多様化であることは言うまでもない。

①石器は小形化する傾向のなかで把握されるが、や

やヴァラエティが出て来て、大形になるものもある。②神子柴型石斧は小形化と特殊化現象をみることができ、狭長性はあるもので推進され、あるものではブレーキがかけられる。その比3.20とIII期より下降する。③丸のみ刃部をもつものが若干増加の傾向にある。④角形・丸形刃部が相半ばする。⑤打製のものと研磨するものと相半ばする。⑥石器組成の中に更に石鏃と矢柄研磨器が加わる。⑦土器は隆線文系の土器のみである。⑧隆線文系土器以外の土器は組成しない。以上がV期の総括である。

[VI期]

V期とVI期との差は、石器の側面からすれば、極小化現象と、特殊化現象がますます明確になり、土器の側面からすれば隆線文土器以外の土器の組成がますます一般的となるのがこの期である。いわば神子柴系文化の拡散現象であり、末期現象であると考えてよいのではないだろうか。

VI期の標式的な遺跡として上げられるのは山形・日向洞窟遺跡と愛知・シャチノミジュリンナ遺跡である。

シャチノミジュリンナの石器組成は、神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・木葉状尖頭器・柳又尖頭器・彫刻器・先刃・側刃・抉入状搔器・両面石器・礫器・石鏃・矢柄研磨器で、これに更に隆線文系の上器に爪形文土器が加えられている。神子柴型石斧は第1図の47に示したI・A・bと他にI・B・bの縄文中期の打製石斧とみまごうばかりのものが1点ある。石器は概して小形であるが、破片ではあるが神子柴尖頭器などは10cm以上になるものがある。有舌尖頭器は柳又尖頭器そのものであり、その出土例も多い。石鏃は剥片鏃からかなり整ったものがある。いわゆる矢柄研磨器が1点出土している。隆線文系土器は口縁部に横走する細隆線文土器で、この種の土器の終末に位置するものであろう。爪形文土器は小瀬ヶ沢例に併行するようなもので、これが明らかなセットであろうと報告されている。

山形・日向洞窟遺跡も同様な所見を提出するものと考えてよい遺跡である。その組成は神子柴型石斧・神子柴型尖頭器・木葉状尖頭器・有舌尖頭器・三角柱状石錐・石錐・搔器類、石鏃・矢柄研磨器がこれに加わ

り、土器は、第4層の微隆起線文土器・無文土器・爪形文土器・押圧縄文土器の出土との報告をそれにあててよいであろうか。報告者の加藤稔氏によれば、他の洞穴等との対比の上で、これらを更に細分する時期を限定しているが、押圧縄文までが一つのセットであるかもしれない。

ジュリンナと日向洞窟との差は、三角柱状石錐の存在と彫刻器の存在が石器の側であり、土器の側では、押圧縄文土器の存在にかかっていると言えるのである。押圧縄文土器が爪形文土器より後出するとの所見が、火箱岩洞窟などで得られているならば、ジュリンナが、先行し日向洞窟がそれに続くものと把握してよいだろうか。日向洞窟の有舌尖頭器も有舌尖頭器としては最終末期のプロポーションであると理解したい。

この期の神子柴型石斧についてみると、ジュリンナ例は小形化・狭長性が推進された中でみられ、日向例は特殊化現象の中で把握され得るものである。この期はV期のあとを受けてV期にその胎動があった小形化と特殊化が一層推進され、神子柴系文化の拡散に結果するものと考えられる。その狭長性は更に末期的となり、その石器製作技法も一層低次限のものとなり、より縄文的な技法になる。第1図の50~55は長野・宮ノ入遺跡の採集資料であるが、神子柴型石斧の極小化・狭長化、そして特殊化は狭長なとてつもない大形の例も現象するのである。55の柏崎例も、そして56の長野仁礼遺跡出土の例も同様にしてその概念のなかで把握され得るものであろう。第2図、第2表で見るよう、最大幅に対する長さの比が4.04との数を示めすのでも明らかのように、特殊化と狭長性は更に著しい。

VI期を総括してみると、①石器は小形化の中で把握されるが、特殊化も著しい。②狭長性は更に著しく4.04の比を示す。③丸のみ刃部を持つものも若干ふくまれる。④総じて丸形刃部である。⑤すべて研磨されたものである。⑥石器組成はV期とかわらない。⑦土器は隆線文系土器に、爪形文土器、あるいは押圧縄文土器までのセットが認められる。

矢柄研磨器については、山内学派からの提案が相ついで行なわれている。大陸の出土例を上げ前2500年以上に存在することはあり得ないとの比較考古学的論理によって、それの伴う隆線文系土器の草創期は、それ

に近いものであろうとの結論を導いているのである。神子柴系文化のV期には出現するのである。ここには四国・上黒岩第9層が入るものであるが、C¹⁴測定ではおよそ12000年前との数値が出されているのである。この数値をただちに取り入れるかについては問題が残るとしても、この神子柴文化のIII・IV期を一応、洪積世から沖積世への時点に比定することは妥当であろう。こうした観点に立ってみれば、この期の前後を前一万年内外とすることには、周辺科学、いわば第四紀学総合の一致点であるように思われるのである。

4

神子柴系文化を神子柴型石斧を中心としながらその組成にできるだけふれながらI期からVI期まで一応その軌跡を追ってみた。II期とIII期の間、III期とIV期の間には、もう1ステージずつがあるかもしれない予想を持つに至るものであったが、一応現時点における資料を見るに6期を設定し、なおその各期の内部には若干の時間のずれが内容しているようにもみられるところもあった。I期からVI期までの神子柴系文化の変容は、一種劇的な変容であるように思われる。圧倒的な神子柴型石斧のあり方が、神子柴型尖頭器の変容に対応しながら変容し、有舌尖頭器の登場、土器の登場、そして石鏃、矢柄研磨器の登場、それが石器の極小化、特殊化現象のなかで現象したものであって、新石器化現象とも縄文文化現象とも概念化することのできるものであろう。第2図に相關するように、その神子柴型石斧はしだいに狭長性し、小形化の指向の内で特殊化することは機能と対応しながら、その当初の目的性からはなれて行き機能の分化と限定がやがて、文化の拡

散現象となって、縄文文化のなかにというより、縄文文化の自らな担手となって埋没するのは、あくまで海洋にへだてられた列島での隔絶による現象であったのかもしれない。VI期のあとに確実な1期を画し得るかどうかをたしかめていない。たしかめることができないと現段階では言い切ることには問題が残るのであるが、VI期の直後こそが、日本列島における系列の消滅による縄文文化そのものの成立の時点ではないかと考えるのである。

本小論はできる限り図式化につとめたために、より重要な問題点を明らかにすることができなかつたことのあることを恐れている。しかし、本小論が明らかにすることことができたその神子柴系文化の系譜は、実は、この小論に登場できなかつた遺跡を含めたときにまた数歩を前進させることができるものと信じている。有舌尖頭器に注目し、その軌跡を追求して神子柴系文化に至り、その系譜を明らかにすることによって、その石器をめぐる文化のあり方を明らかにできると考え、自分を投じてすでに一昔を過ぎる。本稿で神子柴石斧をめぐっての再論を果したので、今度は、神子柴系型尖頭器と、有舌尖頭器からの再論を準備し、神子柴系文化の系譜に更に一つの前進をもたらしたいと思って用意している。先学の御指導を得たいと思う。また本小論を契機としていくつかの論争が起こればこれに過ぐるものはない。

なお本小論は一志茂樹先生の喜寿祝賀に参加のため、とりいそぎ稿を起したものである。先生の増々の御活躍と長寿を祈念するものである。(1970・8・10)

(長野県小諸市 坂の上小学校教諭)

使用破壊痕のある神子柴型石斧III b型をめぐって

—最近における課題のひろがり—

森 嶋 稔

1

神子柴系文化の標式的な石器の一つである神子柴型石斧について、岡本東三氏の論考（1979）が出てからすぐ、私は小文を草した（1979）。岩本義雄氏の論考（1979）に注目していたところへ、岡本氏の論考は壮大な反論であったので、その問題点について指摘するためであった。

それに対する積極的な再指摘がないままこの小文を書くのは、いさきか時宜を得たとは言いがたいが、岡本氏の言う神子柴型石斧のIII b型の二例にことよせて、その問題点について再びふれてみたいと思う。

それから、今日までの間に行われた二、三の論考が注目されるので、それらもからめて神子柴系文化の研究に対する最近における課題のひろがりについてみるのを、本小文の目的としたい。その一つは横田義章氏によるもの（1981）であり、その二は田中英司氏によるもの（1982）などである。

神子柴型石斧の分類について、私も古く試みた（1970）ものがあるが、完全なものではなかったので、ここでは岡本氏の分類に従うこととしたい。しかし、片刃とされた多くは、巨視的な範疇での事であって、微視的には、円鑿状刃部を持つもののみがその範疇に属するのであるが、そうした問題については後日ふれることとして、本稿の資料は岡本氏のIII b型「小形で、切断したような刃部調整を行う扁平なもの。」二例である。岡本氏は「先土器文化終末期の石斧の系統は、バイカル編年のイサコヴォ期（B.C. 4000～3000年）・セロヴォ期（B.C. 3000～2500年）に対比するのが妥当である。」「先土器時代終末期にはすでに局部磨製石斧があり、その年代観は新しくしなければならない。」しかし、このIII b型の神子柴型石斧と①ウクライナのジエスニスク文化（B.C. 2500～2000年）の石斧、②エジプトのファーム文化（B.C. 4500年）、カルツーム文化

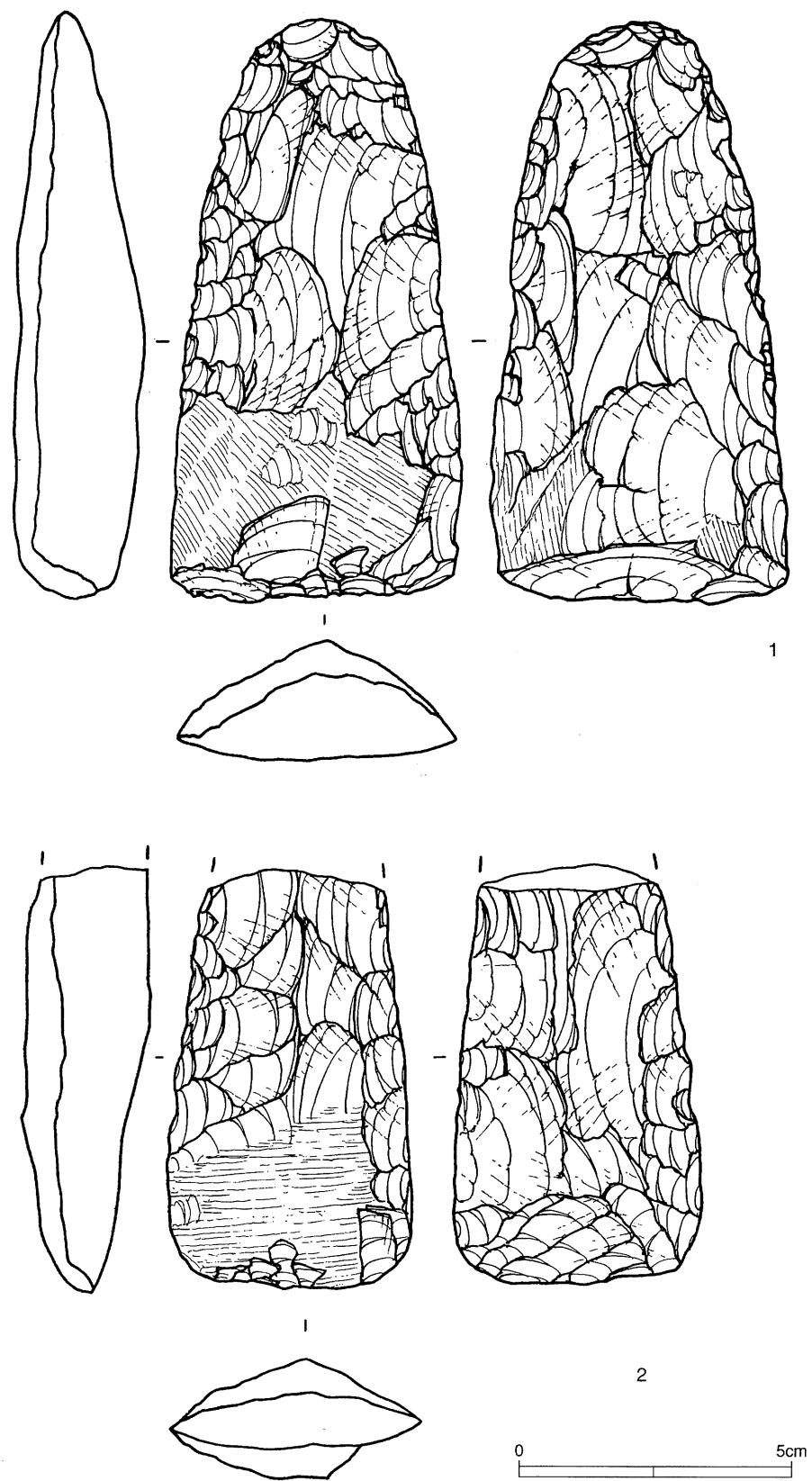
（B.C. 4000年）の石斧と関連させて、いずれも新石器文化の森林地帯の文化との予察を強調している。更に神子柴型石斧の中におけるヴァラエティをシベリア系統のみでなく、中国、蒙古方面との系統を指摘して、「このように石斧の系統をみても、先土器時代終末期は、一系統の文化とはいえない複雑な様相を呈している。」としている。

それに対して、岩本義雄氏は、ウスチチムプトンIV a期（9000±100年）に求めている。土器を伴わない円筒形の細石核から剥取した細石刃と彫刻器、先刃搔器に刃部磨製の神子柴型石斧、①方形の刃部をもち、両側——基部〈森嶋補注〉——の肩に——突起の〈森嶋補注〉——ある十字形の——断面はかまぼこ状の〈森嶋補注〉——両面加工された手斧（1点）、②弧状の刃部をもつ両面加工された打製石斧（1点）と、③弧状の刃部を研磨した刃部磨製石斧（1点）などが、その石器組成である。中石器時代に位置している。

神子柴系文化の「系統論」の中で、極めて注目すべき諸問題であることは言うまでもない。しかし、私の前掲の小文でもふれたように、それらが起源であるとの認識は早計であると思うのである。日本列島で確認された同系の遺跡は100をはるかに超え、大陸ではまだそれ以下であるという状況の中では、系統の予察はできても、起源の予察はむずかしいと思うのである。ウスチチムプトンIV aより古い同系文化の資料が、まだ日の目を見ないでいる可能性が大きいと思われる中で、まず、日本列島内資料では、ここまで理解できるというものを把握することが枢要である。そうした把握を短絡的に起源論として結びつけてはならないと思うのである。

2

ここに図示した二例の石器は、ともに長野県小県郡



第1図 使用破壊痕のある神子柴型石斧III_b二例 (4/5) 1. 屋敷畑出土 2. 菅平採集

Fig.1 Mikoshiba-type axes (Type III_b) with use-breakage.
1: Yashikihata site, 2: Sugadaira (surface material)

真田町菅平高原で採集されたものである。1はその菅平高原の東組1223～1265番地口号地籍から小林八郎氏によって採集保管されていたもので、この石器を手がかりとして発掘調査を1968年に行ったことがある。その詳細についてはまだ未整理であるので後日にゆずり、今回はこの石器のみについて見ておきたいと思う。遺跡は舌状の台地で、神子柴遺跡例からはじまって、同系列の遺跡に強く共通性のある地形上に位置している。通称、屋敷畠といわれている地点であって、それを遺跡名としている。2は真田町長（おさ）小学校資料室蔵品中に見出したもので、ラベルには「菅平出土」とのみあって、出土地点は特定できない。

1は全長10.6cm、最大幅5.3cmで、厚さ2.1cmである。頁岩製。基部は丸くなり、刃部に向って扇状に開いて行き、最大幅で刃部となることを平面範型としているらしい。表・裏面ともに剥離がゆきとどいており、裏面はできる限り平滑になるような剥離、表面はかまぼこ状になるよう中央稜が高く弧をなすように剥離されている。刃部の作出は、岡本氏のIII b型そのものであり、ほぼ直線状のきわめてゆるやかな弧をなすように意図されていたものと思われるが、表面のかまぼこ状弧の頂点へ、ほぼ50°の角度で加撃が行われ、一撃で剥取し刃部刃線を構成したものと思われる状況である。刃線は丸鑿状である。刃部の研磨は器体の中央線に直行する90°～50°程の斜行するよう行われている。神子柴、唐沢B例のように棒状砥石によって行われたものと思われる。表面刃部すみに新しい欠損がかかるが、内部は黒色で、現面は風化が進み灰白色を呈している。

2は全長7.5cm、最大幅4.5cm、厚さ1.5cmである。頁岩製。基部は新しい欠損で、内部は灰黒色を呈している。器体表面は風化し、灰白色である。この器体も1同様に基部は丸く、最大幅が刃部となるよう平面範型をとっているものと見てよい。また1よりはその調整剥離は荒いけれど表・裏面ともきれいに行きとどいている。表面及び裏面の意図する形状は、1とまったく同様である。そして刃部の作出も、いわゆるIII b型に属するもので、同様にして刃線もゆるい弧状となるよう調整剥離がなされている。しかし、2が1と異なるのは、1では1回の剥離によったものを、2では数回の樋状剥離によってなされているということである。

刃線は丸鑿状である。刃部の研磨は、器体の中心線に對してほとんど直行するもので、斜行するものはない。しかし、その研磨は1同様に凹みにまで行われていることからすれば、同様の棒状砥石でなくてはできないようと思われる。

1・2に共通する刃こぼれについて見ておきたい。刃こぼれは、使用による破壊痕であるから、その観察は、この石器の機能の理解につながるものと言えよう。刃こぼれが使用による破壊痕でない、アクシデントによる破壊痕の場合は、きわめてアトランダムである。この2点の器体にその共通するものがあるとすれば、それは共通の使用目的のための使用による破壊痕であるとすることができるからである。

神子柴例も、唐沢B例も使用による破壊痕を認めることができなかつたが、本2例は明らかにその破壊痕に共通性が認められ、それが刃こぼれであることと認めうるものと思われる。III b型は、“hollow-Cut”と呼ばれる切断したような刃部に特徴があると岡本氏が指摘するように、直線に近い弧状刃部が、破壊によって減り刃線の後退を現象していることがわかる。1では中央部で3mm内外、2では2mm内外であろうか。しかもその破壊痕はすべて器体の表面に集中していることが注意される。これは岡本氏が「両刃I型はヨコ斧の可能性が大きい。」と言うのとは合わせに、III b型はヨコ斧（手斧）であることを示している。しかもその着柄は表面を向うにし、裏面を柄方向の手前にするものであり、断面形における丸鑿状刃部刃線による機能は、例えば木質の素材に凹みを作るためのものと考えられる内容をもっている。刃部は使用による破壊によって切れなくなると再生をする。そうして次第に短小となり重量も減じてしまい、使用に耐えなくなると遺棄されてしまうのである。III b型はヨコ斧であるが、片刃の石斧はほとんどヨコ斧である可能性が強く、刃部構成が蛤刃となるものはタテ斧である可能性が強い。しかし、すでに述べたように、巨視的に見て片刃であるが、微視的には蛤刃であるという石斧については、問題は単純ではないので後日にゆずりたいと思っている。だがしかし、更に微視的には、単なる片刃の刃部というものは存在しないのかもしれないあって、こうした面からの追求をすでに用意しているところで

あるが、後稿としたい。

3

福岡県春日市門田（もんでん）遺跡では、二地点で半舟底型細石核、細石刃に神子柴型石斧が伴っているという（木下修、1976年、横田義章 1981年）。先にふれたウスチチムプトンIV a・IV b期の石器群を思い出す。細石核の形態が異なることが気にかかるが、しかし蒙古・シベリア中部にかけての円筒・円錐形細石核に対して、シベリア極東・中国東北にかけてのくさび形細石核の分布の中で、同様の生産形態の関連があったときに、同様の機能をもつ石器群を作ったと考える方が適切であろう。とりわけ、工作用の工具と思われる石器群は、系統を越えても関連的であり、また保守的であるように思われるのをあって、同一技法を後代まで尾を引くように若干の変化をもたらしながら残っているもののように思われる。

門田遺跡の資料中、資料6にあげられた神子柴型石斧はまさにIII b型に属するものであって、その形態は、屋敷畠遺跡例の1にその製作技法、とりわけ刃部の作出は同様な方法によって、丸鑿状に整えている。表面の研磨の方法は明確でないが、偏平でかまぼこ状を呈するようになされていることに注意される。他にもう1点、ずんぐり形のものがある。なお門田遺跡の谷地区では、細石刃と半舟底型細石核、そして長野県長野市大室・宮ノ入遺跡の資料と瓜二つの神子柴型石斧が検出されているが、ここから爪形文土器が得られているので、横田氏は同「石斧が細石器・爪形文土器と同一インダストリーに属するものと判断しておきたい。」としている。当然門田遺跡では、南台地→谷地区という変遷が理解されるのであろう。この所見は極めて重要なように思われる。九州における神子柴系文化の存在については明らかにならなかったが、にわかに明らかになって来た。本州・四国等では、神子柴型石斧に土器が伴出するときは有舌尖頭器、植刃を伴っているのであって、まだ、九州の門田型の石器組成を示すものはない。大きなへだたりであり、極めて興味ある事実である。それらは福井洞穴・泉福寺洞穴などの所見とあわせ、細石器と土器（豆粒文・隆線文・爪形文）との組成と関連するものであることは言うま

でもないところであろう。私案による神子柴型石斧の編年（森嶋 1970年）の第VI期に相当するもので、山形県日向洞穴、愛知県酒呑ジュリンナ、長野市大室・宮ノ入などの遺跡との関連を考えられるよう思う。それは、おそらくは全遺物の組成が明らかにならない現段階では、明らかになった部分のみの関連性からみれば、まず極めて狭長な神子柴型石斧の段階であること、組成する土器群には明確に爪形文土器が入るということである。そうした視点からすれば、この福岡県門田の谷地点は、神子柴系文化の第VI期、いわば最終末期に相当するように思われる。しかし、この第VI期、九州以東においては、狭長な神子柴型石斧、同尖頭器、木葉形尖頭器、有舌尖頭器、石鏃、彫刻器、先刃、側刃、抉入搔器、礫器、有溝砥石などの石器群に、隆線文土器に爪形文土器が加えられるというような組成を内容としているのに対して、いわゆる尖頭器群におきかえて、細石器群というあり方をしているのが九州の地域性であると、同一ステージ上で考えるべきであるのだろうか。それともウスチチムプトンIV a・IV b期の資料群との関連を優先させて、その中国東北地区及び韓半島経由の石器文化と考えるべきであろうか。その通過によって、円錐・円筒形細石核が、楔形細石核へと転換が可能であり、結果したと理解すべきなのであろうか。しかし、仮りにも付会的な結論を引き出してはならない。今は、その事実を正しく認識すべき段階であって、門田遺跡例のような、細石器群+神子柴型石斧+土器群という組成を示す遺跡の増加を見守るべきであろうと考えるのである。

青森県大平山元I遺跡では有舌尖頭器の組成を見ないで、原始的な石鏃をもち、土器を組成しているのを見れば、第III期と第IV期との間に介在する時間的位置にあるもののように思われ、土器を持つという点からすれば、第IV a期あたり、従来の第IV期を第IV b期とすべきかとも思われるが、この土器が注意される。無文で器壁に植物纖維を混入し、角底の土器であるらしいのである。この種の土器は、旧権太の乙名丘（otonaoka）遺跡出土の土器を標式とするものであって、乙名丘I石器文化とされるものが注意される。モサンブル例に近い神子柴型石斧と有舌尖頭器、木葉形尖頭器、基部の丸い尖頭器、彫刻器、搔器などが組成し

ているが、そこには前記した土器が加わっている。この種の土器は、最古形式の土器として、石刃鎌文化内にも組成しているらしく、北方に偏在しているとみてよい。

サハリン・北海道まわりの有舌尖頭器、土器へとその組成をひろげるものと、中国・東北区・韓半島まわりの細石器+土器へと組成をひろげるものとが、旧石器時代終末期から縄文時代の最初頭の位置に展開していたかは、極めて興味ある課題である。かなり明らかになった部分と、その緒についた部分とがあつて今後の調査研究の進展に期待するところである。

4

遺跡・遺構の性格論とも言える田中氏の「神子柴遺跡は収蔵遺跡という呼び名にふさわしい出土状況である。」という「交易関係の品物」のデポ址であるとの認識は注意される。石器製作址としての性格を指摘する神奈川県寺尾の第I文化層のものや、東京都前田耕地5区のものなどの出土状況を検証しながら、神子柴や唐沢B遺跡などを、交易関係の品物のデポ址と分析したのである。その内には「石器が定型的であり完形であり、規則的に配列・集積されている」からというものを受けての延長線上での展開である。本、屋敷畠資料などのように、いわゆる使用による破壊痕を持つ石器が、どういうわけか出土例のすくないことに注意しなければならない。しかし、確実にあるのである。その上、使用破壊痕なり、使用痕なりがまったくないと言わわれて来た多くの石器が、顕微鏡的な調査研究を経ていない今日、まだ結論は一種の予断になる恐れがあ

るようと思われる。——生活時の一セットが揃っているのはむしろ生活址的ではないだろうか——という考えはまだ私の中で変ってはいない。ある特殊な、あるいは一定の機能を果たすよう意図されたと思われる遺跡は、その機能点のみを満足させる遺物群のみを持っているものではないだろうか。世帯道具全体を持つというあり方は生活址的であると見ているのである。本資料のような類例もなお多くの集積が期待され、通常の生活の中の、生産労働の直接の息吹きを更に再構築してみたいと思っているのである。

神子柴系文化の研究にとっての最近の課題のひろがりについて見て来たが、大方の、御教示を受たいと思っている。興味ある課題は山積しているように思える。

引用文献

- 1 森嶋 稔「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』22—10 1970
- 2 岡本東三「神子柴・長者久保文化について」奈良国立文化財研究所『研究論集』V 1979
- 3 岩本義雄「シベリア・極東との関係からみた大平山元遺跡」青森県立郷土館『大平山元I遺跡発掘調査報告書』1979
- 4 森嶋 稔「神子柴型石斧をめぐる最近の動向」『考古学ジャーナル』No.167 1979
- 5 横田義章「いわゆる神子柴型石斧の資料」九州歴史資料館『研究論集』7 1981
- 6 田中英司「神子柴遺跡におけるデポの認識」『考古学研究』29—3No.115 1982

長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器

—その神子柴系文化の系譜試論(予報)—

森 嶋 稔

1

上和沢は Kamiwasa と発音する。上和沢は旧更級郡信田村にあって、長野市篠ノ井堀の内で千曲川に合流する支流聖川の中流にそそぐ和沢の作る西面する小テラス状地形上に位置する。遺跡はすでに近年の開田工事によって破壊されてしまっている。ここに図示した尖頭器（第1図）は、その開田工事以前、普通畑であったときに採集されたもので、昭和28年より行われた「信濃史料」第一巻調査の際にはすでに認められ、その地名表には、

673 田野口上和沢 山麓 (縄) 石槍 単独出土
(蔵) 信田小学校

と記載されている。その後、前述した開田工事には、8 cmに及ぶ石刃と黒耀石の原塊（石核か）が採集されたが、石刃一点のみ残されて、更埴市桑原小学校資料室の所蔵となっている。

遺跡点の山側に見られる地層の断面を見ると、黒石腐植表土が30cmでその下層に褐色上層10cm、以下、黄褐色火山灰質ローム層となっている。もとより、そのうちの石器産出層位を知ることは不可能である。

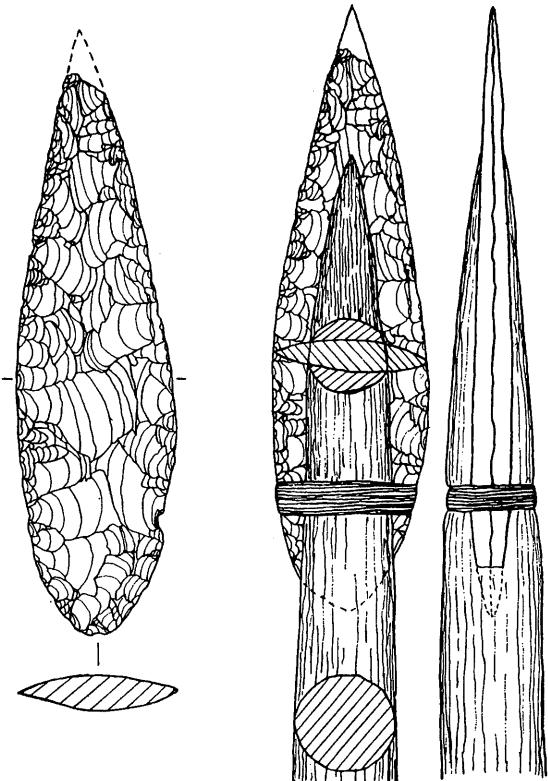
2

上和沢出土の尖頭器は最大長11.2cm、最大幅3.1cm、最大厚0.7cmで、石材は黒耀石である。尖端と基部とを若干欠失しており、それを復原すれば最大長12.1cmを計るかなり大形の尖頭器である。

調整は入念な押圧剥離技法によりなされ、第一次剥離痕を残さない完全な両面加工品である。器体はほぼシンメトリーであるが、右側縁はやや曲線が乱れ、左側縁は流れるように基部へ至っている。器体の最大幅は中央より基部寄りにあって、その位置と基部端との間には、器体側縁がやややせるように抉入部が作出される特徴をもち、基部はごくわずか欠失しているが、

著しく尖るようなものではなく、丸みを帯びるものと思われる。器体調整の技法はかなり洗練されており、大きくてうすい剝片を交互に、あるいは連続してとっているその剝離面は器体の中央部を越えて行われているものすらも見られる美麗な一例である。

石刃は図示しなかったが、打面より約1 cmほどのところで折れており、現在最大長7.5cm、最大幅2.4cm、最大厚0.7cmで、主要剝離面に内曲している。打面と反対側の先端には、背面及び主要剝離面に若干の調整打痕がある。黒耀石製である。



第1図 上和沢遺跡出土尖頭器（左）とその装着例
Fig.1 Point from Kamiwasa and its possible way of hafting

この種の尖頭器は長大、扁平、基部寄りに最大幅をもつ特徴から「神子柴型尖頭器」といえよう。神子柴型尖頭器は儀器的（あるいは副葬的）なものか、あるいは短剣（fish-knife）様のものかと考えられてきたが、後者には半月形石器その他がこれにあたり、前者には資料の増加もあって、一様のものとは考えられなくなってきた。

儀器的なものとの理解の根底には、長大、偏平、基部寄りの最大幅の特徴の観察によって、それは実用的なものとするにためらわれたこと、あるいはその器体の使用痕の欠除、またはその特殊な出土状況に対する理解が横たわっているのである。

しかし、神子柴型尖頭器のすべては儀器的なものではないし、また、短剣様のものではない。それが文字通り石槍としての機能をもつものとは考えられないであろうか。第1図（右）に示したものは、石槍としての「神子柴型尖頭器」の装着の際に考えられる一例である。本上和沢出土の尖頭器に想定復原をしてみたが、こうした器体のはさみこみ、基部の縛縛、天然アスファルト等による固定によって、長さ25.5cm、幅5cm、厚さ1.2cmの神子柴遺跡出土の尖頭器すらも、充分その石槍としての実用的な機能を果すことができるものと考えられよう。基部の縛縛は天然アスファルト等による固定が、この時期にも考慮されるとすれば、必要なないものになるものと理解してよいものではなかろうか。

はさみこみによる器体の保持は格段の前身と思われ、これが大形器体の発生にもつながるものであったかもしれない。その損傷度は基部のみの固定としたときのものとは比べものにならないものであろう。しかし、それは一度損傷すると、補修されたかどうか、それが全器体のつけかえになったかどうか。こうした装着の技法はその去就のなかで、やがて有舌尖頭器を、そして組み合わせ石器一植刃の技法を発生させてゆくものと理解される。

「神子柴型尖頭器」は強く、長大、三面調整、断面三角の（時には刃部に特徴のある丸のみ状を呈し、刃部周辺のみに磨製の技法をほどこした）石斧「神子柴型石斧」を伴なっているのが通常的である。それは、神子柴型石斧を伴なっている、というよりは、神子柴型石斧に伴なっている、というべきである。神子柴型石斧に伴なう石器群は、昭和33年、神子柴遺跡発掘以来、様々な議論が試みられ、そのうち比較考古学まと方法によって問題を克服しようとする試みも行われた。それによって核心にふれたかのように思われた。しかし、それはむしろ解決点ではなく、出発点であったということができよう。青森県の長者久保、長野県の神子柴などの石器セットは、当時の概念を超えていたからである。

この上和沢においても見ることのできる所謂神子柴型尖頭器は、もちろんひとり尖頭のみを追いかけても意味はない。その共存する石器セットを、あるいは土器の所在を、様式学的あるいは層位学的に関係諸科学を動員してこそ、その全容を明らかにできるものと思われる。

近時、この「神子柴型石斧」に伴う一群の石器文化はかなり明確になってきた部分が多い。分布の範囲も日本列島北半に濃厚であることもその一つで、そうしたなかで、神子柴型石斧が次第に形態変化をとげながら、神子柴型尖頭器を伴ないつつ、更に①大形石刃などを伴う一群、②彫刻器などを伴なう一群、③尖頭器を多量に伴なう一群、④有舌尖頭器を伴なう一群、⑤植刃などを伴なう一群、⑥土器を伴なう一群など、仮にまとめるこことできる群（それは時間的ステージをも意味する）が把握できるものと理解される。

この「神子柴系文化」ともいわれるべき石器文化は、従来から論じられてきたような、先土器文化終末期の縦につながるべきである一時限に限った事情でないことは、最早や明らかであると認められる状況になりつつある。

この試論についての用意は漸次ととのってきているので、詳論は後日にゆずり、本稿では、上和沢の尖頭器を中心、「神子柴系文化」の去就とその系譜の試論のための予報としたい。

神子柴型尖頭器とその周辺の二、三の課題

森 嶋 稔

1

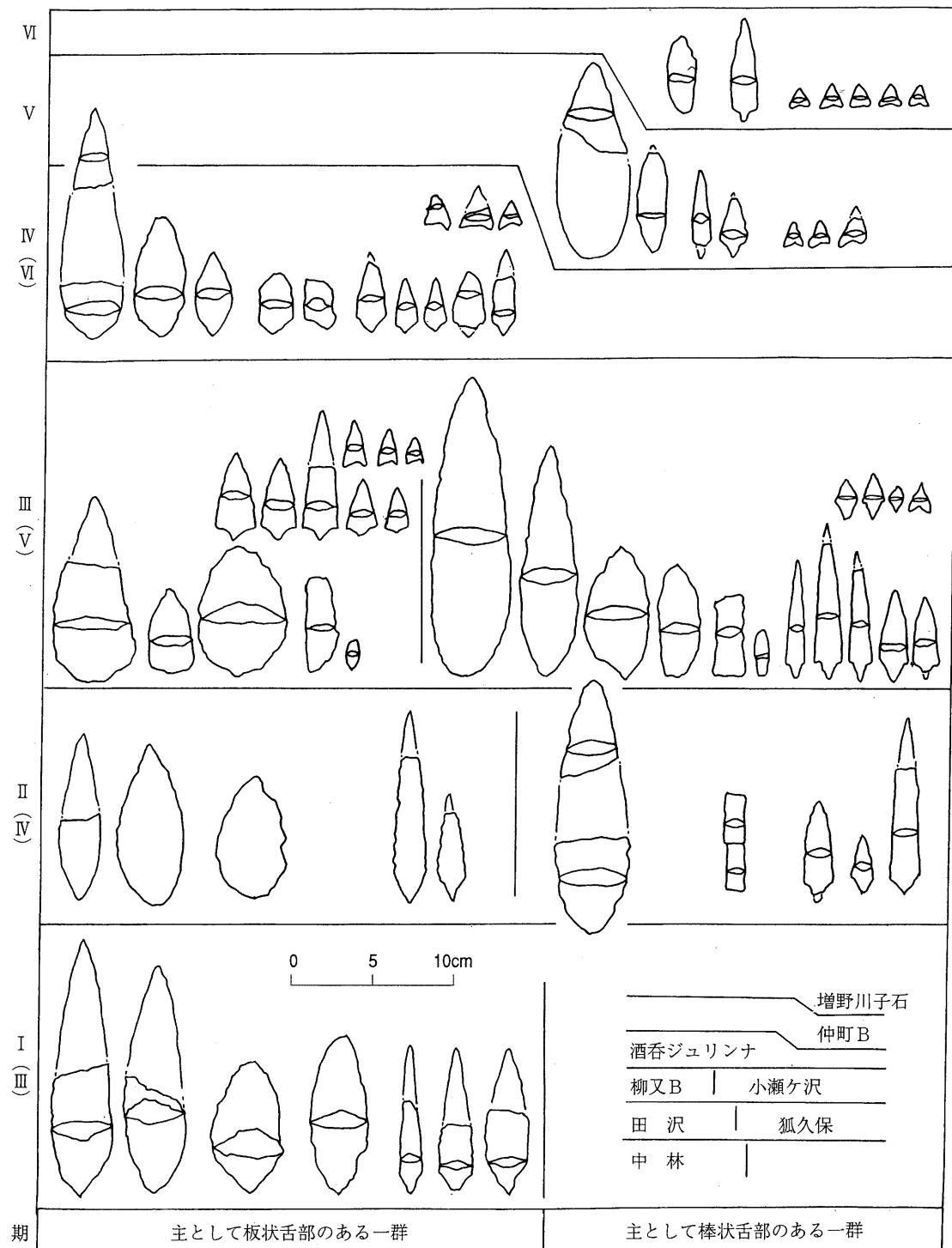
神子柴型石器組成が、いつ、どこで発生したものかは極めて重大な課題であるが、今この問題についての答えは可能ではない。しかし、すでに指摘した（森嶋1985）ように、「日本列島で確認された同系の遺跡は100をはるかに超え、大陸ではまだそれ以下であるという状況の中では、系統の予察はできても、起源の予察はむずかしい」と思っているのである。それは現段階において、起源論は可能でなくとも、系統論は可能であるということである。その大きな手がかりは、神子柴型石器組成の中の、神子柴型石斧と神子柴型尖頭器の型式学的な形態変化を把握することと、それに伴う他の石器組成および文化組成の変遷展開を加えて把握することにあるものと思われる。神子柴型石器組成中の神子柴型石斧と神子柴型尖頭器は、この特徴のある石器組成をきわだたせている大きなカルチュアル・メントである。そのカルチュアル・メントの変遷展開に理解を与えることができるということは、その成立の要因、その繁栄の要因、そしてその解体の要因の理解に近づくというものであるはずである。多く生産用具としての石器は、その中に生産様態の対応としての意志表現を内在している。したがって神子柴型石器組成をもつ石器文化に、いくつかの変遷展開の階梯を把握できるとすれば、ある生産様態を維持継承した部族集団の文化とも呼ぶことのできるものと考え、それを神子柴型系文化としてきたのである。土器をその文化組成の中に持たない時期と、土器を文化組成の中に持つ時期とにまたがる一系の文化とのあり方は、極めて重要な課題であるが、現段階において資料批判の不可能な調査資料以外の資料を除外してもなお、カルチュアル・メントである神子柴型石斧と神子柴型尖頭器は、極めて保守的に確実に継承伝達されていることがわかる。

まず神子柴型尖頭器の側から、この文化の変遷を見ようとした（森嶋1967）。そして神子柴型石斧の側から3回（森嶋1968、1970、1984）、そしてやがて神子柴型石器組成の中に明確に加わってくる有舌尖頭器の側からも、理解を加える試みを行った（森嶋1986）。これらによって、系統論的課題にはささやかながらアプローチができたと考えている。しかし、このアプローチによって、成立の要因、繁栄の要因、解体の要因が読めて来たかというと、必ずしも近づいたとは言えない。やはり起源論と接する成立の要因が最も明確でないというのが、正直なところである。しかし、繁栄のファクターはやや明らかとなり、解体のファクターはほぼ明らかになって来たのではないかと思うのである。

2

図示したものは、拙稿（1986）に用いたものの一部に加筆したものである。この変遷図は、有舌尖頭器が組成してくる時期からのものとして、意識的に編成したものであって、（ ）の中に示したように、拙稿（1970）に編成した神子柴型系文化の編年表と対応すると I (III) → II (IV) → III (V) → IV (VI) 期となるものである。

I (III) 期までは土器の伴出は見られない。（I）(II) までは有舌尖頭器は見られない。したがって（I）(II) 期は神子柴型石斧・神子柴型尖頭器の繁盛期であり、その石器組成の中でしめる割合は最も多い。だが I (III) 期になると有舌尖頭器が出現すると、にわかに神子柴型石斧や神子柴型尖頭器は、その石器組成の割合を減少する。いわば有舌尖頭器に多くの機能をゆずり渡した気配さえ感ぜられる。そこで注目しておきたいのは半月形の尖頭器である。平面形がシンメトリカルでないもので、比較的長手のものや半折されたものが多いのも注意される。これらが短柄に装着されたかど



〈() は神子柴型石斧の編年〉

第1図 有舌尖頭器を持つ一群の変遷

Fig.1 Chronological change of tanged points morphology

うかは今のところ定かではないにしても、単に他のシンメトリカルな神子柴型尖頭器と当然その機能に違いがあったものと見てよい。したがって、フィッシュ・ナイフか、あるいはどちらかを何等かのものに植え込み、片側の刃部のみを機能とする石器であったかもしれないものと思われる。神子柴型尖頭器は、偏平、長太、基部寄りに最大幅をもつシンメトリカルな尖頭器を概念とするが、当然この半月形の尖頭器は、その概念の中に入らない。どうやら両面加工の尖頭器状の石器に、その機能による形態変化があったことをしめしていると見ることができる。木葉状の尖頭器と共に、生産用具としての石器は生産様態と対応する意志表現と見るべきであるから、当然形態のバラエティは機能のバラエティであるということを教えているものと思う。

II(IV)、III(V)期は、神子柴型石器組成は更にその割合を減らす。その時期、最も大きい割合をしめすものが有舌尖頭器である。しかし、神子柴型石器組成は、明らかにその残影をとどめていることに注意されるべきである。更にしかし、神子柴型石器組成は有舌尖頭器の加入によって、明確にその解体を始めたと理解さ

れる。解体の要因であると認められる。もう一つ解体の要因は石鏸である。II(IV)期に伴出しなかった石鏸が、III(V)期になると少量ながら検出されはじめる。神子柴型石器組成は更にその割合を減ずるばかりか、とりわけ神子柴型石斧の形態は末期現象を呈して、その終焉を表現する。II(IV) III(V)期にかけて半月尖頭器も残影となり、かわりに細長い両面加工の尖頭状器体を切断した植刃と思われるものが登場する。石鏸はその後を追いかけて出現するのである。IV(VI)期は最後のほてりであろうか。すでに極小化へと向かうのも注意される現象である。

V・VI期は、明確な神子柴型石器組成を認めることはできない。唯、尖頭器の一部と、とりわけ北まわりの棒状舌部のある有舌尖頭器が、ごく少量組成するのみで残影的存在である。神子柴型石器組成、神子柴型系文化のほぼ完全な解体である。そればかりではない。おそらくは旧石器的生産様態のほぼ完全な解体と理解することができよう。

古い文化の解体の仮定は、新しい文化の成立の過程でもある。もう一つの課題が隠されている。

系列編年への試み

—技術的系譜へのアプローチ—

森 嶋 稔

旧石器文化の編年は、古くは杉原莊介氏や芹沢長介氏によるものがあり、これは今日においてもなお古典的評価を与えられている。しかしその後日本列島においては、多くの調査が進行するに及び、幾つかの注目すべき研究が結実しつつあるということができる。そうしたなかで、私は1972年『イワン・ショウコプリヤス氏との対話』の小冊子や、1975『日本の旧石器文化』(雄山閣)において、「石器群の系列による編年」の考え方を提出して来たが、それは大まかにまとめると次のような考え方を基底としたものである。

①石器の型式及び分布は、単に形態やローカルカラーとみるべきでなく、その石器文化の根底には、極めて伝統的で保守的な道具づくりの技術的な継承が、内在している。②その道具づくり技術の保守性は、時には集団のタブーに守られて、集団の規制として、次代に受けつがれたものである。道具はその集団の生産のための労働用具である。集団の生産は、単一静的なものでなく、季節の周期に合わせて、複雑かつ動的なものであったとみることができる。そうした集団の生産は、第四紀の自然環境の変動や、ヒトビトによるよりよい生産の仕方の工夫などの要素によってもまた動的

であったにちがいない。そうしたさまざまな生産の動的要素をふまえた、集団の歴史展開としての生産のありさまを、その集団の生活様態と呼ぶこととする。すると、ある歴史的位置における道具群やその道具づくりの技術は、その集団の生産様態に対応しているとみることができる。③したがって、日本列島旧石器文化の、その文化遺物における製作技術論を基底とする型式学の確定、分布学の展開こそがより人間の動的把握を可能にするものと考えている。そうした上に立って、系列編年の試みは行われたものである。④系列の存在は、人間集団の存在を物語るものである。それによって、どこの、どんな部族集団が、何時頃、ユーラシア大陸の東のはずれに侵入してきて、どんな歴史的展開をとげて、やがて列島に閉じこめられることにより、日本列島ナイズ、縄文ナイズをとげていったかを、知ることができるようになるのである。

近年、広域火山灰を鍵層とする、各エリアにおける同時性が明らかになりつつあることは、重要なことである。より細密な系列編年の可能性が高められていくものと期待している。

縄文文化期		縄文創化期	10,000	縄文文化ナイズ				
縄文文化期		室谷洞窟 火箱岩洞窟 一の沢洞窟			福井洞窟7層			柳又BII 田沢 狐久保上層
縄文文化期		立川 月岡 中土荒屋			V ②	狭山B (矢出川)	井島II 井島I	長者久保 唐沢B
縄文文化期		立川 月岡 中土荒屋			V ①	川見野IV上 L1H上 仙川III	宮田山	神子柴
旧石器期	晩	狐久保下層 上ヶ屋c 小坂 弁天島		杉久保AIII 上ヶ屋a		IV	前原IV上 (男女倉B) (男女倉J) 茂呂砂川	国府
		山屋I		金谷原				
新石器期	後	新堤 横前		横道		III	前原IV中2 野川IV3a 鈴木V上	鷺羽山I
		+ 東山		杉久保AII 神山				
新石器期	文	成田		杉久保AI (石子原)		II 前	野川V 鈴木VII上 (茶臼山)	鷺羽山I
新石器期	前	30,000		東山系 杉久保系		I	(西之台X) (中山谷X)	国府系 神子柴系
縄文文化期		東山系 杉久保系		茂呂系		国府系 神子柴系		

第1表 旧石器文化の編年
Table1 Chronology of the Palaeolithic cultures of Japan